

# 硝子戸の中

夏目漱石

青空文庫



硝子戸ガラスどの中から外を見渡すと、霜除しもよけをした芭蕉ばしやうだの、赤い実みの結なった梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがすぐ眼に着くが、その他にこれと云つて数え立てるほどのものはほとんど視線に入つて来こない。書齋にいる私の眼界は極きわめて単調で、そうしてまた極めて狭いのである。

その上私は去年の暮から風邪かぜを引いてほとんど表へ出ずに、毎日この硝子戸の中にばかり坐すわっているのです、世間の様子はちつとも分らない。心持が悪いから読書もあまりしない。私はただ坐つ

たり寝たりしてその日その日を送っているだけである。

しかし私の頭は時々動く。気分も多少は変る。いくら狭い世界の中でも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離しているこの硝子戸の中へ、時々人が入つて来る。それがまた私にとっては思いがけない人で、私の思いがけない事を云つたり為たりする。私は興味に充ちた眼をもつてそれらの人を迎えたり送つたりした事さえある。

私はそんなものを少し書きつづけて見ようかと思う。私はそうした種類の文字が、忙がしい人の眼に、どれほどつまらなく映るだろうかと懸念している。私は電車の中でポケットから新聞を出して、大きな活字だけに眼を注いでいる購読者の前に、私の書

くような閑散な文字を列ならべて紙面をうずめて見せるのを恥ぢずかしいものの一つに考える。これらの人々は火事や、泥棒や、人殺しや、すべてその日その日の出来事のうちに、自分が重大と思う事件か、もしくは自分の神経を相当に刺戟しげきし得る辛しんらつ辣な記事のほかに、新聞を手取る必要を認めていないくらい、時間に余裕をもたないのだから。——彼らは停留所で電車を待ち合わせる間に、新聞を買って、電車に乗っている間に、昨日きのう起つた社会の變化を知って、そうして役所か会社へ行き着くと同時に、ポケットに収めた新聞紙の事はまるで忘れてしまわなければならぬほど忙がしいのだから。

私は今これほど切りつめられた時間しか自由にできない人達の

軽蔑けいべつを冒おかして書くのである。

去年から歐洲では大きな戦争が始まっている。そうしてその戦争がいつ済むとも見けんとう当あがつかない模様である。日本でもその戦争の一小部分を引き受けた。それが済むと今度は議会が解散になった。来るきたべき総選挙は政治界の人々にとつての大切な問題になっている。米が安くなり過ぎた結果農家に金が入らないので、どこでも不景気だと零こぼしている。年中行事で云えば、春の相撲すもうが近くに始まろうとしている。要するに世の中は大変多事である。硝子戸の中にじつと坐っている私なぞはちよつと新聞に顔が出せないような気がする。私が書けば政治家や軍人や実業家や相撲すもう狂きやうを押し退おけて書く事になる。私だけではとてもそれほどの胆力が

出て来ない。ただ春に何か書いて見ろと云われたから、自分以外にあまり関係のないつまらぬ事を書くのである。それがいつまでつづくかは、私の筆の都合と、紙面の編輯へんしゅうの都合とできまるのだから、判然はつきりした見当は今つきかねる。

## 二

電話口へ呼び出されたから受話器を耳へあてがって用事を訊きいて見ると、ある雑誌社の男が、私の写真を貰もらいたいのだが、いつ撮とりに行って好いか都合を知らしてくれろというのである。私は「写真は少し困ります」と答えた。

私はこの雑誌とまるで関係をもっていなかった。それでも過去三四年の間にその一二冊を手にした記憶はあった。人の笑っている顔ばかりをたくさん載<sup>の</sup>せるのがその特色だと思ったほかに、今は何にも頭に残っていない。けれどもそこにわざとらしく笑っている顔の多くが私に与えた不快の印象はいまだに消えずにいた。それで私は断<sup>こと</sup>わろうとしたのである。

雑誌の男は、卯<sup>うどし</sup>年の正月号だから卯年の人の顔を並べたいのだという希望を述べた。私は先方のいう通り卯年の生れに相違なかった。それで私はこう云った。――

「あなたの雑誌へ出すために撮<sup>と</sup>る写真は笑わなくってはいけないのでしよう」

「いえそんな事はありません」と相手はすぐ答えた。あたかも私が今までその雑誌の特色を誤解していたごとくに。

「当り前の顔で構いませんなら載せていただいても宜しゅうございます」

「いえそれで結構でございますから、どうぞ」

私は相手と期日の約束をした上、電話を切った。

なかいちにち

中一日おいて打ち合せをした時間に、電話をかけた男が、綺麗な洋服を着て写真機を携えて私の書斎に這入って来た。私はしばらくその人と彼の従事している雑誌について話をした。それから写真を二枚撮って貰った。一枚は机の前に坐っている平生の姿、一枚は寒い庭前の霜の上に立っている普通の態度であった。書

齋は光線がよく透とおらないので、機械を据すえつけてからマグネシアを燃もした。その火の燃えるすぐ前に、彼は顔を半分ばかり私の方へ出して、「御約束ではございますが、少しどうか笑っていただけますまいか」と云った。私はその時突然微かすかな滑こっけい稽けいを感じた。しかし同時に馬鹿な事をいう男だという気もした。私は「これで好いでしよう」と云ったなり先方の注文には取り合わなかった。彼が私を庭の木立こだちの前に立たして、レンズを私の方へ向けた時、また前と同じような鄭てい寧ねいな調子で、「御約束ではございますが、少しどうか……」と同じ言葉を繰くり返かえした。私は前よりもなお笑う気になれなかった。

それから四日ばかり経たつと、彼は郵便で私の写真を届けてくれ

た。しかしその写真はまさしく彼の注文通りに笑っていたのである。その時私は中あてが外はずれた人のように、しばらく自分の顔を見つめていた。私にはそれがどうしても手を入れて笑っているようにこしら拵えたものとしか見えなかつたからである。

私は念のため家うちへ来る四五人のものにその写真を出して見せた。彼らはみんな私と同様に、どうも作つて笑わせたものらしいという鑑定を下くだした。

私は生れてから今こんにち日までに、人の前で笑いたくもないのに笑つて見せた経験が何度となくある。その偽いつわりが今この写真師のために復讐ふくしゅうを受けたのかも知れない。

彼は気味きみのよくない苦笑を洩もらしている私の写真を送つてくれ

たけれども、その写真を載せると云った雑誌はついに届けなかった。

### 三

私がHさんからヘクトーを貰った時の事を考えると、もういつの間にか三四年の昔になっている。何だか夢のような心持もする。その時彼はまだ乳離れちよなのしたばかりの小供であった。Hさんの御弟子は彼を風呂敷ふろしきに包んで電車のに載せて宅まで連れて来てくれた。私はその夜彼を裏の物置の隅すみに寝かした。寒くないように藁わらを敷いて、できるだけ居心地の好い寝床ねどこを拵こしらえてやったあと、私

は物置の戸を締めた。すると彼は宵の口から泣き出した。夜中には物置の戸を爪で掻き破つて外へ出ようとした。彼は暗い所にたったひとり寝るのが淋しかったのだろう、翌る朝までまんじりともしない様子であった。

この不安は次の晩もつづいた。その次の晩もつづいた。私は一週間余りかかつて、彼が与えられた藁の上によく安らかに眠るようになるまで、彼の事が夜になると必ず気にかかった。

私の小供は彼を珍らしがって、間がな隙がな玩弄物にした。けれども名がないのでついに彼を呼ぶ事ができなかつた。ところが生きたものを相手にする彼らには、是非とも先方の名を呼んで遊ぶ必要があつた。それで彼らは私に向つて犬に名を命けてくれと

せがみ出した。私はとうとうヘクトーという偉い名を、この小供達の朋友ほうゆうに与えた。

それはイリアッドに出てくるトロイ一の勇将の名前であった。

トロイと希臘ギリシヤと戦争をした時、ヘクトーはついにアキリスのた

めに打たれた。アキリスはヘクトーに殺された自分の友達の讐かたきを

取ったのである。アキリスが怒いかつて希臘方がたから躍おどり出した時に、

城の中に逃げ込まなかつたものはヘクトー一人であった。ヘクト

ーは三たびトロイの城壁をめぐつてアキリスの鋒ほこさき先を避けた。

アキリスも三たびトロイの城壁をめぐつてその後あとを追いかけた。

そうしてしまいにとうとうヘクトーを槍やりで突き殺した。それから

彼の死骸しがいを自分の軍車チャリオットに縛しばりつけてまたトロイの城壁を三度

引き摺り廻した。……

私はこの偉大な名を、風呂敷包にして持って来た小さい犬に与えたのである。何にも知らないはずの宅うちの小供も、始めは変な名だなあと云っていた。しかしじきに慣れた。犬もヘクトーと呼ばれるたびに、嬉うれしそうに尾を振った。しまいにはさすがの名もジョンとかジョージとかいう平凡なヤソキようしんじや耶蘇教信者の名前と一様に、毫ごうも古典クラシカル的な響を私に与えなくなった。同時に彼はしだいに宅のものから元もとほど珍重されなくなった。

ヘクトーは多くの犬がたいてい罹かかるジステンパーという病氣のために一時入院した事がある。その時は子供がよく見舞みまいに行つた。私も見舞に行つた。私の行つた時、彼はさも嬉しそうに尾を振つ

て、懐<sup>なつ</sup>かしい眼を私の上に向けた。私はしやがんで私の顔を彼の傍<sup>そば</sup>へ持つて行つて、右の手で彼の頭を撫<sup>な</sup>でてやった。彼はその返礼に私の顔を所<sup>ところ</sup>嫌<sup>きら</sup>わず舐<sup>な</sup>めようとしてやまなかつた。その時彼は私の見ている前で、始めて医者<sup>すず</sup>の勧<sup>すす</sup>める少量の牛乳を呑<sup>の</sup>んだ。それまで首を傾<sup>かし</sup>げていた医者も、この分ならあるいは癒<sup>な</sup>るかも知れないと云つた。ヘクトーははたして癒<sup>な</sup>つた。そうして宅<sup>うち</sup>へ歸つて来て、元氣に飛<sup>と</sup>び廻<sup>ま</sup>つた。

#### 四

日ならずして、彼は二三の友達<sup>こしら</sup>を拵<sup>しら</sup>えた。その中<sup>うち</sup>で最も親<sup>ちか</sup>しか

つたのはすぐ前の医者キリストきようの宅ふさわにいる彼と同年輩ぐらいの悪戯者いたずらものであつた。これは基督教徒いたんしやに相応ふさわしいジョンという名前はるかを持つていたが、その性質は異端者いたんしやのヘクトーよりも遙はるかに劣つていたようである。むやみに人に噛かみつく癖くせがあるので、しまいにはとうとう打ち殺ころされてしまった。

彼はこの悪友を自分の庭に引き入れて勝手な狼藉ろうぜきを働らいて私を困らせた。彼らはしきりに樹の根を掘つて用もないのに大きな穴あを開けて喜んだ。綺麗な草花きれいの上にわぎと寝転ねころんで、花も茎ようしやも容赦なく散らしたり、倒たふしたりした。

ジョンが殺されてから、無聊ぶりような彼は夜遊よあそび昼遊ひなたびを覚えるようになった。散歩などに出かける時、私はよく交番そばの傍ひなたに日向ひなたぼ

つこをしている彼を見る事があつた。それでも宅にさえいれば、よくうさん臭いものに吠えほついて見せた。そのうちで最も猛烈に彼の攻撃を受けたのは、本所辺から来る十歳とおばかりになる角兵衛かくべ獅子えじしの子であつた。この子はいつでも「今日は御祝ごんちい」と云つて入つて来る。そうして家うちの者から、麵麩パンの皮と一錢銅貨を貰わないうちは帰らない事に一人できめていた。だからヘクトーがいくら吠えても逃げ出さなかつた。かえつてヘクトーの方が、吠えながら尻尾しっぽを股またの間に挟はさんで物置の方へ退却するのが例になつていた。要するにヘクトーは弱虫であつた。そうして操行からいうと、ほとんど野良犬のらいぬと扱えらぶところのないほどに墮落していた。それでも彼らに共通な人懐ひとなつつこい愛情はいつまでも失わずにいた。時

々顔を見合せると、彼は必ず尾を掉つて私に飛びついて来た。あるいは彼の背を遠慮なく私の身体に擦りつけた。私は彼の泥足のために、衣服や外套を汚した事が何度あるか分らない。

去年の夏から秋へかけて病気をした私は、一カ月ばかりの間ついにヘクトーに会う機会を得ずに過ぎた。病がようやく愈つて、床の外へ出られるようになってから、私は始めて茶の間の縁に立つて彼の姿を宵闇の裡に認めた。私はすぐ彼の名を呼んだ。しかし生垣の根にじつとうずくまっている彼は、いくら呼んでも少しも私の情けに応じなかつた。彼は首も動かさず、尾も振らず、ただ白い塊のまま垣根にこびりついてるだけであつた。私は一カ月ばかり会わないうちに、彼がもう主人の声を忘れてしまったも

のと思つて、かす微かなあいしゆう哀愁を感じずにはいられなかつた。

まだ秋の始めなので、どこの間の雨戸も締められずに、星の光が明け放たれた家の中からよく見られる晩であつた。私の立つていた茶の間の縁には、家のものが二三人いた。けれども私がヘクトーの名前を呼んでも彼らはふり向きもしなかつた。私がヘクトーに忘れられたごとくに、彼らもまたヘクトーの事をまるで念頭に置いていないように思われた。

私は黙つて座敷へ歸つて、そこに敷いてある布団の上に横になつた。病後の私は季節に不相当なくろはちじよう黒八丈の襟のかかつためいせ銘仙のどてらを着ていた。私はそれを脱ぐのが面倒だから、そのまま仰あおむけ向に寝て、手を胸の上で組み合せたなり黙つて天井

を見つめていた。

## 五

翌<sup>あくるあさ</sup>朝<sup>あさ</sup>書齋の縁に立つて、初<sup>はつあき</sup>秋の庭の面<sup>おもて</sup>を見渡した時、私は偶然また彼の白い姿を苔<sup>こけ</sup>の上に認めた。私は昨<sup>ゆうべ</sup>夕の失望を繰<sup>く</sup>り返<sup>かえ</sup>すのが厭<sup>いや</sup>さに、わざと彼の名を呼ばなかった。けれども立つたなりじつと彼の様子を見守らずにはいられなかった。彼は立木<sup>たちぎ</sup>の根<sup>ね</sup>方に据<sup>す</sup>えつけた石の手水鉢<sup>ちようずばち</sup>の中に首を突き込んで、そこに溜<sup>たま</sup>っている雨<sup>あまみず</sup>水をびちやびちや飲んでいた。

この手水鉢はいつ誰が持って来たとも知れず、裏庭の隅<sup>すみ</sup>に転<sup>ころ</sup>が

つていたのを、引越した当時植木屋に命じて今の位置に移させた  
ろっかくがた  
六角形のもので、その頃は苔こけが一面に生はえて、側面に刻みつけ  
た文字もんじも全く読めないようになっていた。しかし私には移す前  
度判はつきり然とそれを読んだ記憶があつた。そうしてその記憶が文字  
として頭に残らないで、変な感情としていまだに胸の中を往来し  
ていた。そこには寺と仏と無常においただよの匂においが漂ただよっていた。

ヘクトーは元氣なさそうに尻尾しっぽを垂れて、私の方へ背中を向け  
ていた。手水鉢を離れた時、私は彼の口から流れる垂涎よだれを見た。

「どうかしてやらないといけない。病気だから」と云つて、私は  
看護婦かえりを顧かえりみた。私はその時まだ看護婦を使つていたのである。

私は次の日も木賊とくさの中に寝ている彼を一目見た。そうして同じ

言葉を見護婦に繰り返した。しかしヘクトーはそれ以来姿を隠したぎり再び宅へ帰つて来なかつた。

「医者へ連れて行こうと思つて、探したけれどもどこにもおりません」

家のものはこう云つて私の顔を見た。私は黙つていた。しかし腹の中では彼を貰い受けた当時の事さえ思い起された。届書

を出す時、種類という下へ混血児と書いたり、色という字の下へ赤あかまだら斑と書いた滑稽も微かに胸に浮んだ。

彼がいなくなつて約一週間も経つたと思つた頃、一二丁隔つたある人の家から下女が使に來た。その人の庭にある池の中に犬の死骸が浮いているから引き上げて頸輪を改ためて見ると、私の家の

名前が彫りつけてあつたので、知らせに來たというのである。下女は「こちらで埋めておきましょうか」と尋ねた。私はすぐ車夫をやつて彼を引き取らせた。

私は下女をわざわざ寄こしてくれた宅がどこにあるか知らなかつた。ただ私の小供の時分から覚えてゐる古い寺の傍だろつとばかり考えていた。それは山鹿素行の墓のある寺で、山門の手前に、旧幕時代の記念のように、古い榎が一本立っているのが、私の書齋の北の縁から数多の屋根を越してよく見えた。

車夫は筵の中にヘクトーの死骸を包んで歸つて來た。私はわざとそれに近づかなかつた。白木の小さい墓標を買つて來さして、それへ「秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ」という一句を書いた。

私はそれを家のものうちに渡して、ヘクトーの眠っている土の上に建てさせた。彼の墓は猫の墓から東ひがしきた北きたに当って、ほぼ一間ばかり離れているが、私の書斎の、寒い日の照らない北側の縁に出て、硝子戸ガラスどのうちから、霜しもに荒された裏庭を覗くと、二つともよく見える。もう薄黒く朽くちかけた猫のに比べると、ヘクトーのはまだ生なまなま々なまなましく光っている。しかし間もなく二つとも同じ色に古びて、同じく人の眼につかなくなるだろう。

## 六

私はその女に前後四五回会った。

始めて訪ねられた時私は留守であつた。取次のものが紹介状を持って来るように注意したら、彼女は別にそんなものを貰う所がないといつて帰つて行つたそうである。

それから一日ほど経つて、女は手紙で直接に私の都合を聞き合せに來た。その手紙の封筒から、私は女がつい眼と鼻の間に住んでいる事を知つた。私はすぐ返事を書いて面会日を指定してやつた。

女は約束の時間を違えず來た。三つ柏の紋のついた派出な色の縮緬ちりめんの羽織を着ているのが、一番先に私の眼に映つた。女は私の書いたものをたいいて読んでいるらしかった。それで話は多くそちらの方面へばかり延びて行つた。しかし自分の著作について

初見しよけんの人から賛辞さんじばかり受けているのは、ありがたいようではなはだこそばゆいものである。実をいうと私は辟易へきえきした。

一週間おいて女は再び来た。そうして私の作物さくぶつをまた賞めてくれた。けれども私の心はむしろそういう話題を避けたがつていた。三度目に来た時、女は何かに感激したものと見えて、袂たもとから手帛ハンケチを出して、しきりに涙を拭ぬぐった。そうして私に自分のこれまで経過して来た悲しい歴史を書いてくれないかと頼んだ。しかしその話を聴かない私には何という返事も与えられなかった。私は女に向つて、よし書くにしようで迷惑を感じる人が出て来はしないかと訊きいて見た。女は存外判然ほんつきりした口調で、実名じつみようさえ出さなければ構わないと答えた。それで私はとにかく彼女の

経歴を聴くために、とくに時間を拵えた。

するとその日になって、女は私に会いたいという別の女の人を連れて来て、例の話はこの次に延ばして貰いたいと云った。私には固より彼女の違約を責める気はなかつた。二人を相手に世間話をして別れた。

彼女が最後に私の書齋に坐つたのはその次の日の晩であつた。彼女は自分の前に置かれた桐の手焙の灰を、真鍮の火箸で突ツつきながら、悲しい身の上話を始める前、黙っている私にこう云つた。

「この間は昂奮して私の事を書いていただきたいように申し上げましたが、それは止めに致します。ただ先生に聞いていただく

だけにしておきますから、どうかそのおつもりで……」

私はそれに対してこう答えた。

「あなたの許諾を得ない以上は、たといどんなに書きたい事柄こと柄がらが出て来てもけつして書く気遣きづかいはありませんから御安心なさい」

私が充分な保証を女に与えたので、女はそれではと云つて、彼女の七八年前からの経歴を話し始めた。私は默然もくねんとして女の顔を見守っていた。しかし女は多く眼を伏せて火鉢ひばちの中ばかり眺めていた。そうして綺麗きれいな指で、真鍮の火箸を握つては、灰の中へ突き刺した。

時々腑ふに落ちないところが出てくると、私は女に向つて短かい質問をかけた。女は単簡たんかんにまた私の納得なつとくできるように答をし

た。しかしたいていは自分一人で口を利きいていたので、私はむしろ木像のようにじつとじているだけであつた。

やがて女の頬は熱ほてつて赤くなつた。白粉おしろいをつけていないせい  
か、その熱つた頬の色が著るしく私の眼に着いた。俯うつむき向になつ  
ているので、たくさんある黒い髪の毛も自然私の注意を惹ひく種  
なつた。

## 七

女の告白は聴いている私を息苦しくしたくらいに悲痛きわを極めた  
ものであつた。彼女は私に向つてこんな質問をかけた。――

「もし先生が小説を御書きになる場合には、その女の始末をどうなさいますか」

私は返答に窮した。

「女の死ぬ方がいいと御思いになりますか、それとも生きているように御書きになりますか」

私はどちらにでも書けると答えて、暗あんに女の気色けしきをうかがった。女はもつと判然あいさつした挨拶を私から要求するように見えた。私は仕方なしにこう答えた。――

「生きるという事を人間の中心点として考えれば、そのままに生きて差さしつかえ支かえないでしょう。しかし美しくしいものや気高けだかいものを一義において人間を評価すれば、問題が違って来るかも知れま

せん」

「先生はどちらを御扱おえらびになりますか」

私はまた躊躇ちゆうちよした。黙もくつて女のいう事を聞きいているよりほ

かに仕方がなかつた。

「私は今持つているこの美しい心持こころが、時間というもののためにだんだん薄うすれて行くのが怖こわくつてたまらないのです。この記憶きおくが消きえてしまつて、ただ漫然まんぜんと魂たまの抜ぬ殻がらのように生きている未来を想像すると、それが苦痛くつうで苦痛くつうで恐おそろしくつてたまらないのです」

私は女おんなが今広い世間せかいの中にたつた一人立ひとりたちつて、一寸いっすんも身動みずかきのできない位置いちにいる事を知しっていた。そうしてそれが私の力ちからで

どうする訳にも行かないほどに、せつぱつまつた境遇である事も知っていた。私は手のつけようのない人の苦痛を傍観する位置に立たせられてじつとしていた。

私は服薬の時間を計るため、客の前も憚はばからず常に袂たもと時計を座蒲団ざぶとんの傍わきに置く癖くせをもっていた。

「もう十一時だから御帰りなさい」と私はしまいに女に云った。女は厭いやな顔もせず立ち上った。私はまた「夜が更ふけたから送つて行って上げましょう」と云つて、女と共に沓くつぬぎ脱ぬに下りた。

その時美しい月が静かな夜よを残くまる隈なく照らしていた。往来へ出ると、ひっそりした土の上にひびく下駄げたの音はまるで聞こえなかった。私は懐ふところ手てをしたまま帽子も被かぶらずに、女おとの後に跟つ

いて行つた。曲り角の所で女はちよつと会釈えしやくして、「先生に送つていただいてはもつたいのうございます」と云つた。「もつたいない訳がありません。同じ人間です」と私は答えた。

次の曲り角へ来たとき女は「先生に送つていただくのは光榮でございませう」とまた云つた。私は「本当に光榮と思ひますか」と真面目まじめに尋ねた。女は簡単に「思ひます」とはつきり答えた。私は「そんなら死なずに生きていらつしやい」と云つた。私は女がこの言葉をどう解釈したか知らない。私はそれから一丁ばかり行つて、また宅うちの方へ引き返したのである。

むせつぽいような苦しい話を聞かされた私は、その夜かえつて人間らしい好い心持を久しぶりに経験した。そうしてそれが尊たつと

い文芸上の<sup>さくぶつ</sup>作物を読んだあとの気分と同じものだという事に気がついた。有楽座や帝劇へ行つて得意になつていた自分の過去の影法師が何となく浅ましく感ぜられた。

## 八

不愉快に<sup>み</sup>充ちた人生をとぼとぼ<sup>たど</sup>辿りつつある私は、自分のいつか一度到着しなければならぬ死という境地について常に考えている。そうしてその死というものを生よりは楽なものだとばかり信じている。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊たつとい」

こういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往おう来らいするようになった。

しかし現在の私は今まのあたりに生きている。私の父ふ母ぼ、私の祖そ父ふ母ぼ、私の曾そう祖そ父ふ母ぼ、それから順次さかのに溯さかのぼつて、百年、二百年、乃至ないし千年万年の間に馴じゆん致ちされた習慣を、私一代げだつで解げ脱だつする事ができないので、私は依然としてこの生に執着しているのである。

だから私わたしの他ひとに与よける助じよ言ごんはどうしてもこの生の許す範囲内においてしなればすまないように思う。どういう風に生きて行くかという狭い区域のなかでばかり、私は人類の一人いちにんとして他の人類の一人に向わなければならぬと思う。すでに生の中に活

動する自分を認め、またその生の中に呼吸する他人を認める以上は、互いの根本義はいかに苦しくてもいかに醜くてもこの生の上に置かれたものと解釈するのが当り前であるから。

「もし生きているのが苦痛なら死んだら好いでしょう」

こうした言葉は、どんなに情なく世を觀なずる人の口からも聞き得ないだろう。医者などは安らかな眠おに赴おもむこうとする病人に、わざと注射の針を立てて、患者の苦痛を一刻でも延ばす工夫を凝こらしている。こんな拷ごう問もんに近い所作しよが、人間の徳義として許しされているのを見ても、いかに根強く我々が生の一字に執しゆ着ちやくしているかが解る。私はついにその人に死をすすめる事ができなかつた。

その人はとても回復の見込みのつかないほど深く自分の胸を傷けられていた。同時にその傷が普通の人の経験にないような美しい思い出の種となつてその人の面を輝やかしていた。

彼女はその美しくしいものを宝石のごとく大事に永久彼女の胸の奥に抱き締めていたが、不幸にして、その美しくしいものほども直さず彼女を死以上に苦しめる手傷そのものであつた。二つの物は紙の裏表のごとくとうてい引き離せないのである。

私は彼女に向つて、すべてを癒す「時」の流れに従つて下れと云つた。彼女はもしそうしたらこの大切な記憶がしだいに剥けて行くだろうと嘆いた。

公平な「時」は大事な宝物を彼女の手から奪う代りに、そ

の傷口もしだいに療治してくれるのである。烈しい生の歡喜を夢のように暈ぼかしてしまふと同時に、今の歡喜に伴なう生々なまなましい苦痛も取り除とける手段を怠おこたらないのである。

私は深い恋愛に根ざしている熱烈な記憶を取り上げても、彼女の創きずぐち口したたから滴る血潮を「時」に拭ぬぐわしめようとした。いくら平凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適當だったからである。

かくして常に生よりも死を尊たつといと信じている私の希望と助言は、ついにこの不愉快に充みちた生というものを超越する事ができなかつた。しかも私にはそれが実行上における自分を、凡庸ほんような自然主義者として証しょうこ拠立たててたように見えてならなかつた。私は今で

も半信半疑の眼でじつと自分の心を眺めている。

## 九

私が高等学校にいた頃、比較的親しく交際つきあった友達の中に〇という人がいた。その時分からあまり多くの朋友ほうゆうを持たなかつた私には、自然〇と往来ゆききを繁しげくするような傾向があつた。私はたいてい一週に一度くらいの割で彼を訪たずねた。ある年の暑中休暇などには、毎日欠かさず真砂町まさごちように下宿している彼を誘つて、大川おおかわの水泳場まで行つた。

〇は東北の人だから、口の利きき方かたに私などと違つた鈍どんでゆつた

りした調子があつた。そうしてその調子がいかにもよく彼の性質を代表しているように思われた。何度となく彼と議論をした記憶のある私は、ついに彼の怒おこつたり激したりする顔を見る事ができずにしまった。私はそれだけでも充分彼を敬愛あたいに価ちやうしやする長者ちやうしやとして認めていた。

彼の性質が鷹揚おうようであるごとく、彼の頭脳も私よりは遙はるかに大きかった。彼は常に当時の私には、考えの及ばないような問題を一人で考えていた。彼は最初から理科へ入る目的をもっていないが、好んで哲学の書物などを繙ひもといた。私はある時彼からスペンサーの第一原理という本を借りた事をいまだに忘れずにいる。

空の澄み切つた秋あき日和びよりなどには、よく二人連れ立って、足の

向く方へ勝手な話をしながら歩いて行つた。そうした場合には、  
往来へ堀越へいごしに差し出た樹きの枝から、黄色に染まつた小ちさい葉が、  
風もないのに、はらはらと散る景色けしきをよく見た。それが偶然彼の  
眼に触れた時、彼は「あッ悟つた」と低い声で叫んだ事があつた。  
ただ秋の色の空くうに動くのを美しくいと観ずるよりほかに能のない  
私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符ふちよう徴として怪しい  
響を耳に伝えるばかりであつた。「悟りというものは妙なものだ  
な」と彼はその後あとから平生のゆつたりした調子で独ひとりごと言のよう  
に説明した時も、私には一口の挨拶あいさつもできなかつた。

彼は貧生であつた。大観音おおがんのんの傍そばに間借をして自炊じすいしていた頃  
には、よく干から鮭ぎけを焼いて佗わびしい食卓に私を着かせた。ある時

は餅菓子もちがしの代りに煮豆を買って来て、竹の皮のまま双方から突っつき合つた。

大学を卒業すると間もなく彼は地方の中学に赴任した。私は彼のためにそれを残念に思つた。しかし彼を知らない大学の先生には、それがむしろ当然と見えたかも知れない。彼自身は無論平氣であつた。それから何年かの後のちに、たしか三年の契約で、支那のある学校の教師に雇われて行つたが、任期が充みちて帰るとすぐまた内地の中学校長になつた。それも秋田から横手に遷うつされて、今では樺太かほふとの校長をしているのである。

去年上京したついでに久しぶりで私を訪たずねてくれた時、取次のものから名刺を受取つた私は、すぐその足で座敷へ行つて、いつ

もの通り客より先に席に着いていた。すると廊下伝ろうかづたいに室へやの入口まで来た彼は、座蒲団ざぶとんの上にきちんと坐すわっている私の姿を見るや否や、「いやに澄すましているな」と云った。

その時向むこうの言葉が終るか終らないうちに「うん」という返事がいつか私の口を滑すべって出てしまった。どうして私の悪わるくち口を自分で肯定するようなこの挨拶あいさつが、それほど自然に、それほど雑作ぞうさなく、それほど拘泥こだわずに、するすると私の咽喉のどを滑すべり越したものだろうか。私はその時透明な好い心持がした。

## 十

向い合つて座を占めた〇と私とは、何より先に互の顔を見返して、そこにまだ昔むかしのままの面影おもかげが、懐なつかしい夢の記念のように残っているのを認めた。しかしそれはあたかも古い心が新しい気分の中にぼんやり織り込まれていると同じ事で、薄暗く一面に霞かすんでいた。恐ろしい「時」の威力に抵抗して、再びもとの姿に返る事は、二人にとつてもう不可能であつた。二人は別れてから今会うまでの間に挟はさまつている過去という不思議なものを顧かえりみない訳に行かなかつた。

〇は昔し林檎りんごのように赤い頬と、人一倍大きな丸い眼と、それから女に適したほどふつくりした輪廓りんかくに包まれた顔をもつていた。今見てもやはり赤い頬と丸い眼と、同じく骨張らない輪廓の

持主ではあるが、それが昔しとはどこか違っている。

私は彼に私の口髭くちひげと揉み上げもあを見せた。彼はまた私のために自分の頭を撫なでて見せた。私のは白くなって、彼のは薄く禿はげかかっているのである。

「人間も樺かばい太ふとまで行けば、もう行く先はなかりうな」と私が調か戲らうと、彼は「まあそんなものだ」と答えて、私のまだ見た事のない樺太の話のいろいろして聞かせた。しかし私は今それをみない忘れてしまった。夏は大変好い所だという事を覚えているだけである。

私は幾年ぶりかで、彼といっしょに表へ出た。彼はフロックの上へ、とんびのような外がい套とうをぶわぶわに着ていた。そうして電

車の中で釣革つりかわにぶら下りながら、隠袋かくしから手帛ハンケチに包んだものを出して私に見せた。私は「なんだ」と訊きいた。彼は「栗饅頭くりまんじゆ頭うだ」と答えた。栗饅頭は先刻さつき彼が私の宅うちにいた時に出した菓子であった。彼がいつの間に、それを手帛に包んだらうかと考えた時、私はちよつと驚かされた。

「あの栗饅頭を取つて来たのか」

「そうかも知れない」

彼は私の驚いた様子を馬鹿にするような調子でこう云つたなり、その手帛ハンケチの包をまた隠袋かくしに収めてしまった。

我々はその晩帝劇へ行つた。私の手に入れた二枚の切符に北側から入れという注意が書いてあつたのを、つい間違えて、南側へ

廻ろうとした時、彼は「そつちじやないよ」と私に注意した。私はちよつと立ち留まつて考えた上、「なるほど方角は樺太の方かばふとがたしか確なようだ」と云いながら、また指定された入口の方へ引き返した。

彼は始めから帝劇を知っていると云っていた。しかし晩餐ばんさんを済ました後あとで、自分の席へ帰ろうとするとき、誰でもやる通り、二階と一階の扉ドアを間違えて、私から笑われた。

折々隠袋から金縁きんぐちの眼鏡めがねを出して、手に持った摺物すりものを読んで見る彼は、その眼鏡めがねをはず除さずに遠い舞台を平気で眺めていた。

「それは老眼鏡じゃないか。よくそれで遠い所が見えるね」

「なにチャブドーだ」

私にはこのチャブドーという意味が全く解らなかつた。彼はそれを大差なしという支那語だと云つて説明してくれた。

その夜の帰りに電車の中で私と別れたぎり、彼はまた遠い寒い日本の領地の北の端はずれに行つてしまった。

私は彼を想おもひ出すたびに、達たつじん人という彼の名を考える。するとその名がとくに彼のために天から与えられたような心持になる。そうしてその達人が雪と氷に鎖とぎされた北の果はてに、まだ中学校長をしているのだなと思う。

## 十一

ある奥さんがある女の人を私に紹介した。

「何か書いたものを見ていただきたいのだそうでございます」

私は奥さんのこの言葉から、頭の中でいろいろの事を考えさせられた。今まで<sup>いま</sup>私の所へ自分の書いたものを読んでくれと云つて来たものは何人となくある。その中には原稿紙の厚さで、一寸または二寸ぐらいの嵩<sup>かさ</sup>になる大部のものも交つていた。それを私は時間の都合の許す限りなるべく読んだ。そうして簡単な私はただ読みさえすれば自分の頼まれた義務を果<sup>はた</sup>したものと心得て満足していた。ところが先方では後から新聞に出してくれと云つたり、雑誌へ載せて貰<sup>もら</sup>いたいと頼んだりするのが常であつた。中には他<sup>ひと</sup>に読ませるのは手段で、原稿を金に換えるのが本来の目的である

ように思われるのも少くはなかった。私は知らない人の書いた読みにくい原稿を好意的に読むのがだんだん厭いやになって来た。

もつとも私の時間に教師をしていた頃から見ると、多少の弾力性ができてきたには相違なかった。それでも自分の仕事にかかれば腹の中はずいぶん多忙であった。親切せいちやくずくで見てやろうと約束した原稿すら、なかなか埒らちのあかない場合もないとは限らなかつた。

私は私の頭で考えた通りの事をそのまま奥さんに話した。奥さんはよく私のいう意味を領解して帰って行った。約束の女が私の座敷へ来て、座蒲団ざぶとんの上に坐つたのはそれから間もなくであった。佗わびしい雨が今にも降り出しそうな暗い空を、硝子戸ガラスどこし越に眺めな

がら、私は女にこんな話をした。――

「これは社交ではありません。御互に体裁ていさいの好い事ばかり云い合っていては、いつまで経たつたつて、啓発されるはずも、利益を受ける訳もないのです。あなたは思い切つて正直にならなければ駄目だめですよ。自分さえ充分に開放して見せれば、今あなたがどこに立つてどつちを向いているかという實際が、私によく見えて来るのです。そうした時、私は始めてあなたを指導する資格を、あなたから与えられたものと自覚しても宜よろしいのです。だから私が何か云つたら、腹に答えべき或物を持つている以上、けつして黙つていてはいけません。こんな事を云つたら笑われはしまいか、恥を搔かきはしまいか、または失礼だといって怒られはしまいかな

どと遠慮して、相手に自分という正体を黒く塗り潰した所ばかり示す工夫くふうをするならば、私がいくらあなたに利益を与えようと焦慮せつしても、私の射る矢はことごとく空矢あだやになってしまっただけです。

「これは私のあなたに対する注文ですが、その代り私の方でもこの私というものを隠しは致しません。ありのままを曝さらけ出すよりほかに、あなたを教える途みちはないのです。だから私の考えのどこかに隙すきがあつて、その隙をもしあなたから見破られたら、私はあなたに私の弱点を握られたという意味で敗北の結果に陥おちいるのです。教を受ける人だけが自分を開放する義務をもっていると思うのは間違っています。教える人も己おのれをあなたの前に打ち明けるのです。双方とも社交を離れて勘破かんぱし合うのです。

「そういう訳で私はこれからあなたの書いたものを拝見する時に、ずいぶん手ひどい事を思い切つて云うかも知れませんが、しかし怒つてはいけません。あなたの感情を害するためにはないので。その代りあなたの方でも腑ふに落ちない所があつたらどこまでも切り込んでいらつしやい。あなたが私の主意を了解している以上、私はけつして怒るはずはありませんから。」

「要するにこれはただ現状維持を目的として、うわすべ上滑りな円滑を主位に置く社交とは全く別物なのです。解りましたか」

女は解つたと云つて歸つて行つた。

私に短冊たんざくを書けの、詩を書けのと云つて来る人がある。そうしてその短冊やら続ぬめやらをまだ承諾もしないうちに送つて来る。最初のうちはせつかくの希望を無にするのも気の毒だという考から、拙ますい字とは思いながら、先方の云うなりになつて書いていた。けれどもこうした好意は永続しにくいものと見えて、だんだん多くの人の依頼を無にするような傾向が強くなつて来た。

私はすべての人間を、毎日毎日恥を搔かくために生れてきたものだと思え考える事もあるのだから、変な字を他ひとに送つてやるくらいしよさの所作は、あえてしようと思えば、やれないとも限らないのである。しかし自分が病氣のとき、仕事の忙がしい時、またはそん

な真似まねのしたくない時に、そういう注文が引き続いて起つてくる  
と、實際弱らせられる。彼らの多くは全く私の知らない人で、そ  
うして自分達の送った短冊を再び送り返すこちらの手数てすうさえ、ま  
るで眼中に置いていないように見えるのだから。

そのうちで一番私を不愉快にしたのは播州ばんしゅうの坂越さかごしにいる岩  
崎という人であった。この人は数年前よく端書はがきで私に俳句を書い  
てくれと頼んで来たから、その都度つど向うのいう通り書いて送った  
記憶のある男である。その後のちの事であるが、彼はまた四角な薄い  
小包を私に送った。私はそれを開けるのさえ面倒だったから、つ  
いそのままにして書斎へ放り出しほうりだしておいたら、下女そうじが掃除をする  
時、つい書物と書物の間へ挟みはさ込んで、まず体ていよくしまない失くし

た姿にしてしまった。

この小包と前後して、名古屋から茶の缶が私わたくし宛あてで届いた。

しかし誰が何のために送ったものかその意味は全く解らなかつた。私は遠慮なくその茶を飲んでしまった。するとほどなく坂越の男から、富士登山の画えを返してくれと云ってきた。彼からそんなものを貰おぼった覚えのない私は、打ちうちやっておいた。しかし彼は富士登山の画を返せ返せと三度も四度も催促してやまない。私はついにこの男の精神状態を疑い出した。「大おお方かた気違あやだらう。」私は心の中でこうきめたなり向うの催促にはいっさい取り合わない事にした。

それから二三カ月経たつた。たしか夏の初の頃と記憶しているが、

私はあまり乱雑に取り散らされた書齋の中に坐すわっているのがうつとうしくなつたので、一人でぼつぼつそこいらを片づけ始めた。

その時書物の整理をするため、好い加減に積み重ねてある字引や参考書を、一冊ずつ改めて行くと、思いがけなく坂越の男が寄こした例の小包が出て来た。私は今まで忘れていたものを、眼まのあたり見て驚ろいた。さつそく封を解といて中を檢しらべたら、小さく畳んだ画が一枚入っていた。それが富士登山の図だったので、私はまた吃びっくり驚おどろした。

包のなかにはこの画のほかに手紙が一通添えてあつて、それに画の賛をしてくれという依頼と、御礼に茶を送るという文句が書いてあつた。私はいよいよ驚ろいた。

しかしその時の私はとうてい富士登山の図などに賛をする勇氣をもつていなかった。私の気分が、そんな事とは遙か懸け離れた所にあつたので、その画に調和するような俳句を考えている暇がなかつたのである。けれども私は恐縮した。私は丁寧な手紙を書いて、自分の怠慢を謝した。それから茶の御礼を云つた。最後に富士登山の図を小包にして返した。

### 十三

私はこれで一段落ついたものと思つて、例の坂越の男の事を、それぎり念頭に置かなかつた。するとその男がまた短冊を封じて

寄よこした。そうして今度は義士に關係のある句を書いてくれというのである。私はそのうち書こうと云つてやった。しかしなかなか書く機会が来なかつたので、ついそのままになつてしまつた。けれども執しつこ濃いこの男の方ではけつしてそのままに済ます気はなかつたものと見えて、むやみに催促を始め出した。その催促は一週に一遍か、二週に一遍の割できつと来た。それが必ず端書はがきに限つていて、その書き出しには、必ず「拜啓失敬申し候えども」とあるにきまつていた。私はその人の端書を見るのがだんだん不愉快になつて来た。

同時に向うの催促も、今まで私の予期していなかつた変な特色を帯びるようになった。最初には茶をやつたではないかという言

葉が見えた。私がそれに取り合わずにいると、今度はあの茶を返してくれという文句に改たまつた。私は返す事はたやすいが、その手数てかずが面倒だから、東京まで取りに来れば返してやると云つてやりたくなつた。けれども坂越の男にそういう手紙を出すのは、自分の品格かかに関わるような気がしてあえてし切れなかつた。返事を受け取らない先方はなおの事催促をした。茶を返さないならそれでも好いから、金一円をその代価として送つて寄こせというのである。私の感情はこの男に対してしだいに荒すんで来た。しまいにはとうとう自分を忘れるようになった。茶は飲んでしまった、短冊は失なくしてしまった、以来端書を寄こす事はいつさい無用であると思つてやつた。そうして心のうちで、非常に苦にが々しい気

分を経験した。こんな非紳士的な挨拶あいさつをしなければならぬよ  
うな穴の中へ、私を追い込んだのは、この坂越の男であると思つ  
たからである。こんな男のために、品格にもせよ人格にもせよ、  
幾分の墮落を忍ばなければならぬのかと考えると情なさけなかつたか  
らである。

しかし坂越の男は平氣であつた。茶は飲んでしまい、短冊は失  
くしてしまふとは、余りと申せば……とまた端書そうじに書いて来た。  
そうしてその冒頭には依然として拝啓失敬申し候そうじえどもという文  
句が規則通り繰り返されていた。

その時私はもうこの男には取り合うまいと決心した。けれども  
私の決心は彼の態度に対して何の効果のあるはずはなかつた。彼

は相変らず催促をやめなかつた。そうして今度は、もう一度書いてくれれば、また茶を送つてやるがどうだと云つて来た。それから事いやしくも義士に関するのだから、句を作つても好いだろうと云つて来た。

しばらく端書が中絶したと思うと、今度はそれが封書に變つた。もつともその封筒は区役所などで使うきわ極めて安いねずみいろ鼠色のものであつたが、彼はわざとそれに切手を貼はらないのである。その代り裏に自分の姓名も書かずに投とうかん函していた。私はそれがために、倍の郵税を二度ほど払わせられた。最後に私は配達夫に彼の氏名と住所とを教えて、封のまま先方へ逆送して貰つた。彼はそれで六錢取られたせいか、ようやく催促を断念したらしい態度になつ

た。

ところが二カ月ばかり経つて、年が改まると共に、彼は私に普通の年始状を寄こした。それが私をちよつと感心させたので、私はつい短冊へ句を書いて送る気になった。しかしその贈物は彼を満足させるに足りなかつた。彼は短冊が折れたとか、汚れたとかよご云つて、しきりに書き直しを請求してやまない。現に今年の正月にも、「失敬申し候えども……」という依頼状が七八日頃ななようかに届いた。

私がこんな人に出会つたのは生れて始めてである。

## 十四

ついこの間昔むかし私の家うちへ泥棒の入った時の話を比較的くわ詳しく聞いた。

姉がまだ二人とも嫁かたづかずかたにいた時分の事だというから、年代にすると、多分私の生れる前後に当るのだろう、何しろ勤王とか佐幕とかいう荒々しい言葉の流行はやつたやかましい頃なのである。

ある夜一番目の姉が、夜中よなかに小用こように起きた後あと、手を洗うために、くぐりど潜戸を開けると、狭い中庭すみの隅すみに、壁をお押しつけるような勢いきおいで立たつている梅の古木の根方ねがたが、かつと明るく見えた。姉は思慮しりょをめぐらす暇いとまもないうちに、すぐ潜戸を締しめてしまったが、締めたあとで、今日前けふまへに見た不思議な明るさをそこに立ちながら考えた

のである。

私の幼心に映ったこの姉の顔は、いまだに思い起そうとすれば、いつでも眼の前に浮ぶくらい鮮あざやかである。しかしその幻像はすでに嫁に行つて齒を染めたあとの姿であるから、その時縁えんがわ側に立つて考えていた娘盛りの彼女を、今胸のうちに描き出す事はちよつと困難である。

広い額、浅黒い皮膚、小さいけれども明はつきり確した輪廓りんかくを具えている鼻、人ひとなみ並より大きい二重ふたえまぶち瞼の眼、それから御沢おさわという優しい名、——私はただこれらを綜そうごう合して、その場合における姉の姿を想像するだけである。

しばらく立ったまま考えていた彼女の頭に、この時もしかする

と火事じやないかという懸念けねんが起つた。それで彼女は思い切つてまた切戸きりどを開けて外を覗のぞこうとする途端とたんに、一本の光る拔身ぬきみが、闇やみの中から、四角に切つた潜戸の中へすうと出た。姉は驚いて身を後あとへ退ひいた。その隙ひまに、覆面をした、龕灯がんどう提灯ちようちんを提さげた男が、抜刀のまま、小さい潜戸から大勢家うちの中へ入つて来たのださうである。泥棒の人数にんずはたしか八人とか聞いた。

彼らは、他ひとを殺あやめるために来たのではないから、おとなしくしていてくれさえすれば、家のものに危害は加えない、その代り軍用金を借かせと云つて、父に迫つた。父はないと断つた。しかし泥棒はなかなか承知しなかつた。今角かどの小倉屋こくらやという酒屋へ入つて、そこで教えられて来たのだから、隠しても駄目だと云つて動かな

かつた。父は不精無性に、とうとう何枚かの小判を彼らの前に並べた。彼らは金額があまり少な過ぎると思つたものか、それでもなかなか帰ろうとしないので、今まで床の中に寝ていた母が、「あなたの紙入に入っているのもやっておしまいなさい」と忠告した。その紙入の中には五十両ばかりあつたとかいう話である。泥棒が出て行つたあとで、「余計な事をいう女だ」と云つて、父は母を叱りつけたそうである。

その事があつて以来、私の家では柱を切り組きくみにして、その中へあり金を隠す方法を講じたが、隠すほどの財産もできず、また黒くろ装束そうぞくを着けた泥棒も、それぎり来ないので、私の生長する時分には、どれが切組きりくみにしてある柱かまるで分らなくなつていた。

泥棒が出て行く時、「この家は大変締りの好い宅だ」と云つて賞めたそうだが、その締りの好い家を泥棒に教えた小倉屋の半兵衛さんの頭には、あくる日から擦り傷がいくつとなくできた。これは金はありませんと断わるたびに、泥棒がそんなはずがあるものかと云つては、抜身の先でちよいちよい半兵衛さんの頭を突つついたからだという。それでも半兵衛さんは、「どうしても宅にはありません、裏の夏目さんにはたくさんあるから、あすこへいらつしやい」と強情を張り通して、とうとう金は一文も奪られずにしまった。

私はこの話を妻から聞いた。妻はまたそれを私の兄から茶受話に聞いたのである。

## 十五

私が去年の十一月学習院で講演をしたら、薄謝と書いた紙包を後から届けてくれた。立派な水引みずひきがかかっているので、それを除はずして中を改めると、五円札が二枚入っていた。私はその金を平生から気の毒に思っていた、或懇意な芸術家に贈ろうかしらと思つて、暗あんに彼の来るのを待ち受けていた。ところがその芸術家はまだ見えない先に、何か寄附の必要ができてきたりして、つい二枚とも消費してしまった。

一口でいうと、この金は私にとってけっして無用なものではな

かつたのである。世間の通り相場で、立派に私のために消費されたというよりほかに仕方がないのである。けれどもそれを他にやろうとまで思った私の主観から見れば、そんなにありがたみの附着していない金には相違なかつたのである。打ち明けた私の心持をいうと、こうした御礼を受けるより受けない時の方がよほど颯爽つぱりしていた。

畔柳芥舟君が樗牛会くろやなぎかいしゆうの講演の事で見えた時、私は話のついでとして一通りその理由を述べた。

「この場合私は労力を売りに行つたのではない。好意づくで依頼に応じたのだから、向うでも好意だけで私に酬むくいたらよかろうと思う。もし報酬問題とする気なら、最初から御礼はいくらするが、

来てくれるかどうかと相談すべきはずでしょう」

その時K君は納得なつとくできないといったような顔をした。そうしてこう答えた。

「しかしどうでしょう。その十円はあなたの労力を買ったという意味でなくつて、あなたに対する感謝の意を表する一つの手段と見たら。そう見る訳には行かないのですか」

「品物なら判然はつきりそう解釈もできるのですが、不幸にも御礼が普通営業的の売買ばいばいに使用する金なのですから、どっちとも取れるのです」

「どっちとも取れるなら、この際さい善意の方に解釈した方が好くはないでしょうか」

私はもつともだとも思つた。しかしまたこう答えた。

「私は御存じの通り原稿料で衣食しているくらいですから、無論富裕とは云えません。しかしどうかこうか、それだけで今日こんにちを過すごして行かれるのです。だから自分の職業以外の事にかけては、なるべく好意的に人のために働いてやりたいという考えを持っています。そうしてその好意が先方に通じるのが、私にとつては、何よりも尊たつとい報酬なのです。したがって金などを受けると、私が人のために働いてやるという余地、——今の私にはこの余地がまた極めて狭いのです。——その貴重な余地を腐蝕ふしょくさせられたような心持になります」

K君はまだ私の云う事を肯うけがわない様子であつた。私も強情であ

った。

「もし岩崎とか三井とかいう大富豪に講演を頼むとした場合に、後から十円の御礼を持って行くでしょうか、あるいは失礼だからと云つて、ただ挨拶あいさつだけにとどめておくでしょうか。私の考ではおそらく金銭は持つて行くまいと思うのですが」

「さあ」といっただけでK君は判然した返事を与えなかつた。私にはまだ云う事が少し残つていた。

「己おのぼれ惚おぼかは知りませんが、私の頭は三井岩崎に比べくらるほど富んでいないにしても、一般学生よりはずっと金持に違いないと信じています」

「そうですとも」とK君は首肯うなずいた。

「もし岩崎や三井に十円の御礼を持って行く事が失礼ならば、私の所へ十円の御礼を持って来るのも失礼でしょう。それもその十円が物質上私の生活に非常な潤うるおい沢を与えるなら、またほかの意味からこの問題を眺める事もできるでしょうが、現に私はそれを他ひとにやろうとまで思つたのだから。——私の現下の経済的生活は、この十円のために、ほとんど目に立つほどの影響を蒙こうむらないのだから」

「よく考えて見ましょう」といったK君はにやにや笑いながら帰つて行つた。

## 十六

宅うちの前のだらだら坂を下りると、一間ばかりの小川に渡した橋があつて、その橋向うのすぐ左側に、小さな床屋が見える。私はたった一度そこで髪を刈かつて貰かつた事がある。

平生は白い金かなきん巾きんの幕で、硝子戸ガラスドの奥が、往来から見えないようにしてあるので、私はその床屋の土間に立つて、鏡の前に座を占めるまで、亭主の顔をまるで知らずにいた。

亭主は私の入ってくるのを見ると、手に持った新聞紙ほうしを放り出してすぐ挨拶あいさつをした。その時私はどうもどこかで会つた事のある男に違ちがないという気がしてならなかつた。それで彼が私の後うしろへ廻まわつて、鉢はさみをちよきちよき鳴らし出した頃を見計らつて、こつち

から話を持ちかけて見た。すると私の推察通り、彼は昔むかし寺町の郵便局の傍そばに店を持って、今と同じように、散髪を渡世とせとしていた事が解った。

「高田の旦那だんななどにもだいぶ御世話になりました」

その高田というのは私の従兄いとこなのだから、私も驚いた。

「へえ高田を知ってるのかい」

「知ってるどころじゃありません。始終しじゆうとく徳とく、つて鼻ひいき尻しりにして下すつたもんです」

彼の言葉遣づかいはこういう職人にしてはむしろ丁寧ていねいな方であつた。

「高田も死んだよ」と私がいうと、彼は吃驚びっくりした調子で「ヘッ」

と声を揚あげた。

「いい旦那でしたがね、惜しい事に。いつ頃ごろ御亡おなくなりになりました」

「なに、つい此こ間ないださ。今日で二週間になるか、ならないぐらいのものだろう」

彼はそれからこの死んだ従兄いとこについて、いろいろ覚えている事を私に語った末、「考えると早いもんですね旦那、つい昨日きのうの事としつきや思われぬのに、もう三十年近くにもなるんですから」と云った。

「あのそら求友亭きゆうゆうていの横町にいらしてね、……」と亭主はまた言葉を継つぎ足した。

「うん、あの二階のある家うちだろう」

「ええ御二階がありましたつけ。あすこへ御移りになつた時なんか、方々ほうほうさま様から御祝いわいい物なんかあつて、大變御盛ごさかんでしたかね。それから後あとでしたつけか、行願寺ぎょうがんじの寺内じないへ御引越おんひきこなすつたのは、この質問は私にも答えられなかつた。実はあまり古い事なので、私もつい忘れてしまつたのである。

「あの寺内も今じや大變變つたようだね。用がないので、それからつい入つて見た事もないが」

「變つたの變らないのつてあなた、今じやまるで待合ばかりでさあ」

私はさかなまち肴町さかなまちを通るたびに、その寺内へ入る足袋屋たびやの角の細い

小路こうじの入口に、ごたごたかか掲げられた四角な軒灯の多いのを知っていた。しかしその数を勘かんじょう定して見るほどの道楽気も起らなかつたので、つい亭主のいう事には気がつかずにいた。

「なるほどそう云えば誰たが袖そでなんて看板が通りから見えるようだね」

「ええたくさんできましたよ。もつとも変わるはずですね、考えて見ると。もうやがて三十年にもなろうと云うんですから。旦那も御承知の通り、あの時分は芸者屋つたら、寺内にたった一軒しきや無かつたもんでさあ。東家あずまやつてね。ちようどそら高田の旦那の真ま向むきこうでしたらう、東家の御神灯ごじんとうのぶら下がっていたのは」

## 十七

私はその東家をよく覚えていた。従兄いとこの宅うちのついで向むこうなので、両方のものが出入りではいのたびに、顔を合わせさえすれば挨拶あいさつをし合うぐらいの間柄あいだがらであつたから。

その頃従兄の家には、私の二番目の兄がごろごろしていた。この兄は大の放蕩ほうとうもので、よく宅の懸物かけものや刀剣類を盗み出しては、それを二束三文に売り飛ばすという悪い癖くせがあつた。彼が何で従兄の家に転ころがり込んでいたのか、その時の私には解らなかつたけれども、今考えると、あるいはそうした乱暴を働らいた結果、しばらく家うちを追ひ出されていたかも知れないと思う。その兄のほ

かに、まだ庄さんという、これも私の母方の従兄に当る男が、そこいらにぶらぶらしていた。

縁側えんがわへ腰をかけたなりして、勝手な出放題を並べていると、時々

向うの芸者屋の竹格子たけごうしの窓から、「今日は」こんちなどと声をかけられたりする。それをまた待ち受けてでもいるごとくに、連中は

「おいちよつとおいで、好いものあるから」とか何とか云つて、女を呼び寄せようとする。芸者の方でも昼間は暇だから、三度に一度は御愛嬌ごあいぎょうに遊びに来る。といった風の調子であつた。

私はその頃まだ十七八だつたらう、その上大変な羞恥屋はにかみやで通つていたので、そんな所に居合わしても、何にも云わずに黙つて

隅すみの方に引ひ込んでばかりいた。それでも私は何かの拍ひょう子しで、これらの人々といっしょに、その芸者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢おごらなければならぬので、私は人の買かつた寿司すしや菓子かしをだいぶ食たつた。

一週間ほど経たつてから、私はまたこののらくらの兄あにに連れられて同じ宅へ遊びに行つたら、例の庄ぢやうさんも席せきに居ゐ合あわせて話はながだいぶはずんだ。その時咲さき松まつという若い芸者げんしやが私の顔かほを見て、「またトランプをしましよ」と云いつた。私は小倉こくらの袴はかまを穿はいて四角張しやうかくぢやうつていたが、懐中かいちゆうには一銭いちせんの小遣こづかいさえ無なかつた。

「僕は銭ぜにがないから厭いやだ」

「好こいわ、私わたしが持つてゐるから」

この女はその時眼を病んでもいたのだらう、こういいいいい、  
 綺麗な襦袢じゆばんの袖そででしきりに薄赤くなつた一二重瞼ふたえまぶちを擦こすつていた。  
 その後ご私は「御作おさくが好い御客ごきゃくに引かされた」という噂うわさを、従兄いとこ  
 の家うちで聞いた。従兄の家では、この女の事を咲松さきまつと云わないで、  
 常に御作御作と呼んでいたのである。私はその話を聞いた時、心  
 の内でもう御作に会う機会こも来ないだらうと考へた。

ところがそれからだ**いぶ**経つて、私が例の達人たつじんといつしよに、  
 芝の山内さんないの勸工場かんこうばへ行つたら、そこでまたぱつたり御作に出  
 会つた。こちらの書生姿ひに引き易かえて、彼女はもう品ひんの好い奥様  
 に變つていた。旦那そばというのも彼女の傍そばについていた。……

私は床屋の亭主の口から出た東家あずまやという芸者屋の名前の奥に

潜ひそんでいるこれだけの古い事実を急に思い出したのである。

「あすこにいた御作という女を知ってるかね」と私は亭主に聞いた。

「知ってるどころか、ありや私の姪めいでさあ」

「そうかい」

私は驚ろいた。

「それで、今どこにいるのかね」

「御作は亡なくなりましたよ、旦那」

私はまた驚ろいた。

「いつ」

「いつって、もう昔の事になりますよ。たしかあれが二十三の年

でしたらう」

「へええ」

「しかも浦塩ウラジオで亡くなったんです。旦那が領事館に關係のある人だったもんですから、あっちへいっしょに行きましてね。それから間もなくでした、死んだのは」

私は帰って硝子戸ガラスドの中に坐つて、まだ死なずにいるものは、自分とあの床屋の亭主だけのような気がした。

## 十八

私の座敷へ通されたある若い女が、「どうも自分の周囲まわりがきち

んと片づかないで困りますが、どうしたら宜よろしいものでしょう」と聞いた。

この女はある親戚の宅うちに寄寓きぐうしているので、そこが手狭てせまな上に、子供などが蒼蠅うつるさいのだろうと思つた私の答は、すこぶる簡単であつた。

「どこかさっぱりした家うちを探して下宿でもしたら好いでしよう」「いえ部屋の事ではないので、頭の中がきちんと片づかないで困るのです」

私は私の誤解を意識すると同時に、女の意味がまた解らなくなつた。それでももう少し進んだ説明を彼女に求めた。

「外からは何でも頭の中に入って来ますが、それが心の中心と折

合がつかないのです」

「あなたのいう心の中心とはいったいどんなものですか」

「どんなものと云つて、真まっすぐ直な直線なのです」

私はこの女の数学に熱心な事を知っていた。けれども心の中心が直線だという意味は無論私に通じなかつた。その上中心とははたして何を意味するのか、それもほとんど不可解であつた。女はこう云つた。

「物には何でも中心がございませう」

「それは眼で見る事ができ、尺ものさし度で計る事のできる物体につい

ての話でしょう。心にも形があるんですか。そんならその中心というものをここへ出して御覧なさい」

女は出せるとも出せないとも云わずに、庭の方を見たり、膝ひざの上で両手を擦すつたりしていた。

「あなたの直線というのは比喩たとえじゃありませんか。もし比喩なら、まる円と云つても四角と云つても、つまり同じ事になるのでしよう」

「そうかも知れませんが、形や色が始しじゆう終ゆう変へんつているうちに、少しも変らないものが、どうしてもあるのです」

「その変るものと変らないものが、別々だとすると、要するに心が二つある訳になります。それで好いのですか。変るものはすなわち変らないものでなければならぬはずじゃありませんか」  
こう云つた私はまた問題を元に返して女に向つた。

「すべて外界のものが頭のなかに入つて、すぐ整然と秩序なり段

落なりがはつきりするように納まる人は、おそろくないでしょう。失礼ながらあなたの年齢としや教育や学問で、そうきちんと片づけられる訳がありません。もしまたそんな意味でなくって、学問の力を借りずに、徹底的にどさりと納まりをつけたいなら、私のようなものの所へ来ても駄目だめです。坊さんの所へでもいらつしやい」

すると女が私の顔を見た。

「私は始めて先生を御見上げ申した時に、先生の心はそういう点で、普通の人以上に整ととのつていらつしやるように思いました」

「そんなはずがありません」

「でも私にはそう見えませんでした。内臓の位置までが調ととのつていらつしやるとしか考えられませんでした」

「もし内臓がそれほど具合よく調節されているなら、こんなに始し終じゆう病氣などはしません」

「私は病氣にはなりません」とその時女は突然自分の事を云つた。  
「それはあなたが私より偉い証しょうこ拠こです」と私も答えた。

女は蒲団ふとんを滑すべり下りた。そうして、「どうぞ御おからだ身体ごたいを御大切せつに」と云つて帰つて行つた。

## 十九

私の旧宅は今私の住んでいる所から、四五町奥の馬場下という町にあつた。町とは云い条、その実じつ小さな宿場としか思われな

くらい、小供の時の私には、寂れ切つてかつ淋しく見えた。もともと馬場下とは高田の馬場の下にあるという意味なのだから、江戸絵図で見ても、朱引内しゅびきうちか朱引外しゅびきうちか分らない辺鄙な隅へんぴ すみの方にあつたに違ないのである。

それでも内蔵造くらづくりの家が狭い町内に三四軒はあつたらう。坂を上ると、右側に見える近江屋伝兵衛おうみやでんべえという薬種屋やくしゅやなどはその一つであつた。それから坂を下り切つた所に、間口の広い小倉屋こくらやという酒屋もあつた。もつともこの方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衛ほりべやすべえが高田の馬場で敵を打つ時に、ここへ立ち寄つて、枧酒ますぎけを飲んで行つたという履歴のある家柄いえがらであつた。私はその話を小供の時分から覚えていたが、ついぞそこにしまつてある

という噂うわさの安兵衛が口を着けた杓を見たことがなかった。その代  
 り娘の御北おきたさんの長唄ながうたは何度となく聞いた。私は小供だから上  
 手だか下手だかまるで解らなかつたけれども、私の宅うちの玄関から  
 表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行こうとすると、御北さ  
 んの声がそこからよく聞こえたのである。春の日の午過ひるすぎなどに、  
 私はよく恍惚うっとりとした魂を、麗うらやかな光に包みながら、御北さんの  
 御浚おさらいを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の  
 白壁に身を靠もたせて、佇立たたずんでいた事がある。その御蔭おかげで私はと  
 うとう「旅ころもの衣すずかけは篠懸すずかけの」などという文句をいつの間にか覚え  
 てしまった。

このほかには棒屋が一軒あつた。それから鍛冶屋かじやも一軒あつた。

少し八幡坂はちまんざかの方へ寄つた所には、広い土間を屋根の下に囲い込  
 んだやつちや場ばもあつた。私の家のものは、その主人を、問屋とんや  
 の仙太郎さんと呼んでいた。仙太郎さんは何でも私の父とごく遠  
 い親類つづきになつてゐるんだとか聞いたが、交際つきあいからいうと、  
 まるで疎濶そかつであつた。往来で行き会ふ時だけ、「好い御天気で」  
 などと声をかけるくらいの間あいだがら柄がらに過ぎなかつたらしく思われ  
 る。この仙太郎さんの一人娘が講釈師の貞水ていすいと好い仲になつて、  
 死ぬの生きるのという騒ぎのあつた事も人間ひとぎきに聞いて覚えては  
 いるが、纏まとまつた記憶は今頭のどこにも残つていない。小供の私  
 には、それよりか仙太郎さんが高い台の上に腰をかけて、矢立やたてと  
 帳面を持つたまま、「いーやつちやいくら」と威勢の好い声で下

にいる大勢の顔を見渡す光景の方がよつぽど面白かった。下からはまた二十本も三十本もの手を一度に挙げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろんじだのがれんだのという符徴を、罵しるように呼び上げるうちに、薑や茄子や唐茄子の籠が、それらの節太の手で、どしどしどこかへ運び去られるのを見ているのも勇ましかつた。

どんな田舎へ行つてもありがちな豆腐屋は無論あつた。その豆腐屋には油の臭の染み込んだ縄暖簾がかかつていて門口を流れる下水の水が京都へでも行つたように綺麗だった。その豆腐屋について曲ると半町ほど先に西閑寺という寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い竹藪で一面に掩われているの

で、中にどんなものがあるか通りからは全く見えなかつたが、その奥でする朝晩の御勤おつとめの鉦かねの音ねは、今でも私の耳に残っている。ことに霧きりの多い秋から木枯こがらしの吹く冬へかけて、カンカンと鳴る西関寺の鉦の音は、いつでも私の心に悲しくて冷つめたい或物たたを叩たたき込むように小さい私の気分を寒くした。

## 二十

この豆腐屋の隣に寄席よせが一軒あつたのを、私は夢ゆめ幻うつのよう  
にまだ覚えている。こんな場末ひとよせばに人寄場ひとよせばのあろうはずがないと  
いうのが、私の記憶かすみに霞かすみをかけるせいだろう、私はそれを思い出

すたびに、奇異な感じに打たれながら、不思議そうな眼を見張つて、遠い私の過去をふり返るのが常である。

その席亭の主人あるじというのは、町内の鳶頭とびがしらで、時々目暗縞めくらじまの腹掛すじに赤い筋の入った印絆纏しるしばんてんを着て、突っかけ草履ぞうりか何かでよく表を歩いていた。そこにまた御藤さんおふじという娘があつて、その人の容色きりようがよく家のものうちの口のぼに上つた事も、まだ私の記憶を離れずにいる。後のちには養子を貰つたが、それが口髭くちひげを生やしはた立派な男だったので、私はちよつと驚ろかされた。御藤さんの方でも自慢の養子だという評判が高かつたが、後から聞いて見ると、この人はどこかの区役所の書記だとかいう話であつた。

この養子が来る時分には、もう寄席よせもやめて、しもうた屋やにな

つていたようであるが、私はその宅の軒先にまだ薄暗い看板が  
淋しそうに懸つていた頃、よく母から小遣を貰つてそこへ講釈  
を聞きに出かけたものである。講釈師の名前はたしか、南麟と  
かいった。不思議な事に、この寄席へは南麟よりほかに誰も出な  
かつたようである。この男の家はどこにあつたか知らないが、ど  
の見当から歩いて来るにしても、道普請ができて、家並の  
揃つた今から見れば大事業に相違なかつた。その上客の頭数はい  
つでも十五か二十くらいなのだから、どんなに想像を逞ましくし  
ても、夢としか考えられないのである。「もうしもうし花魁え、  
と云われて八ツ橋なんざますえとふり返る、途端に切り込む刃の  
光」という変な文句は、私がその時分南麟から教わつたのか、そ

れとも後あとになつて落語家はなしかのやる講釈師まねの真似まねから覚えたのか、今では混雑してよく分らない。

当時私の家からまず町らしい町へ出ようとするには、どうしても人気のない茶ちやばたけ 畠たけやぶとか、竹藪たけやぶとかまたは長い田圃路たんぼみちとかを通り抜けなければならなかつた。買物らしい買物はたいてい神楽坂ぐらさかまで出る例になつていたので、そうした必要に馴ならされた私に、さした苦痛のあるはずもなかつたが、それでも矢来やらいの坂を上あがつて酒井様の火ひの見櫓みやぐらを通り越して寺町へ出ようという、あの五六町の一筋道などになると、昼でも陰森いんしんとして、大空が曇つたように始しじゆう終薄暗うすくらかつた。

あの土手の上に一一抱ふたかかえも三抱みかかえもあろうという大木が、何本

となく並んで、その隙間隙間をまた大きな竹藪で塞いでいたのだから、日の目を拝む時間と云つたら、一日のうちにおそらくただの一刻もなかつたのだらう。下町へ行こうと思つて、日和下駄などを穿はいて出ようものなら、きつと非道ひどい目にあうにきまつていた。あすこの霜融しもどけは雨よりも雪よりも恐ろしいもののように私の頭に染しみ込こんでいる。

そのくらい不便な所でも火事の虞おそれはあつたものと見えて、やっぱり町の曲り角に高い梯子はしごが立っていた。そうしてその上に古い半鐘も型のごとく釣るしてあつた。私はこうしたありのままの昔をよく思い出す。その半鐘のすぐ下にあつた小さな膳飯屋いちぜんめしやもおのずと眼先に浮かんで来る。縄暖簾なわのれんの隙間からあたたかそう

な煮<sup>にしめ</sup>の香<sup>におい</sup>が煙<sup>けむり</sup>と共に往来へ流れ出して、それが夕暮<sup>もや</sup>の霽<sup>と</sup>に融<sup>と</sup>け込んで行く趣<sup>おもむき</sup>なども忘れる事ができない。私が子規のまだ生きているうちに、「半鐘と並んで高き冬木<sup>かな</sup>哉」という句を作ったのは、実はこの半鐘の記念のためであつた。

## 二十一

私の家に関する私の記憶は、惣<sup>そう</sup>じてこういう風に鄙<sup>ひな</sup>びている。そうしてどこかに薄ら寒い憐<sup>あわ</sup>れな影を宿している。だから今生き残っている兄から、つい此<sup>こないだ</sup>間、うちの姉達が芝居に行った当時の様子を聴いた時には驚ろいたのである。そんな派<sup>は</sup>出<sup>で</sup>な暮しをし

た昔もあつたのかと思うと、私はいよいよ夢のような心持になるよりほかはない。

その頃の芝居小屋はみんなざるわかちよう猿若町にあつた。電車もくるま俾もない時分に、高田の馬場の下から浅草の観音様の先まで朝早く行き着こうと云うのだから、たいていの事ではなかつたらしい。姉達よなかはみんな夜半に起きてしたく支度をした。途中が物ぶつ騒だといふので、用心のため、下男がきつととも供をして行つたそうである。

彼らはつくど筑土を下りて、柿の木横町からあげば揚場へ出て、かねてその船宿にあつらえておいた屋根船に乗るのである。私は彼らがいかに予期にみ充ちた心をもつて、のろのろほうへいこうしよう砲兵工廠の前から御茶の水を通り越して柳橋までこ漕がれつつ行つただらうと想像する。

しかも彼らの道中はけつしてそこで終りを告げる訳に行かないのだから、時間に制限をおかなかつたその昔がなおさら回顧の種になる。

大川へ出た船は、流を溯さかのぼつて吾妻橋を通り抜けて、今戸の有いまど明楼うめいろの傍そばに着けたものだという。姉達はそこから上あがつて芝居茶屋まで歩いて、それからようやく設けの席につくべく、小屋へ送られて行く。設けの席というのは必ず高土間たかどまに限られていた。これは彼らの服装なりなり顔なり、髪飾なりなりが、一般の眼によく着く便利のいい場所なので、派出を好む人達が、争つて手に入れたがるからであつた。

幕の間には役者に随ついている男が、どうぞ楽屋へお遊びにいら

つしやいましと云つて案内に来る。すると姉達はこの縮緬ちりめんの模様のある着物の上に袴はかまを穿いた男の後にあとについて、田之助とかたのすけ 訥とつし升ようとかいひいきう鬮ひいきの役者の部屋へ行つて、扇せんす子すに画えなどを描かいて貰もらつて帰かえつてくる。これが彼らの見栄みえだつたのだろう。そうしてその見栄は金の力でなければ買えなかつたのである。

帰りには元来もとた路を同じ舟で揚場まで漕ぎ戻す。無要ぶようじん心だからと云つて、下男がまた提ちようちん灯ちんを点つけて迎むかえに行く。宅うちへ着くのは今の時計で十二時くらいにはなるのだろう。だから夜半よなかから夜半までかかつて彼らはようやく芝居を見る事ができたのである。

……

こんな華麗はなやかな話を聞くと、私ははたしてそれが自分の宅に起

つた事か知らんと疑いたくなる。どこか下町の富裕な町家の昔を語られたような気もする。

もつとも私の家も侍さむらいぶん分ぶんではなかつた。派出はでな付つき合あいをしな

ければならない名主なぬしという町人であつた。私の知つてゐる父は、

禿はげ頭あたまの爺じいさんであつたが、若い時分には、一い中ちゆう節ぶしを習つ

たり、馴染なじみの女ぢめに縮ちぢめん緬めんの積つみ夜や具ぐをしてやつたりしたのださうで

ある。青山あおやまに田地でんちがあつて、そこから上つて来る米だけでも、家うち

のものが食うには不足がなかつたとか聞いた。現いまに今生いまき残のこつて

いる三番目の兄などは、その米を舂つく音を始しじゆう終ゆう聞きいたと云つて

いる。私の記憶によると、町内まちうちのものがみんなして私の家うちを呼ん

で、玄関げんかと称とななえていた。その時分の私には、どういふ意味か

解らなかつたが、今考えると、式台のついた嚴めしい玄関付の家は、町内にたった一軒しかなかつたからだろうと思う。その式台を上った所に、突棒や、袖搦や刺股や、また古ぼけた馬上提灯などが、並んで懸けてあつた昔なら、私でもまだ覚えて

## 二十二

この二三年来私はたいてい年に一度くらいの割で病気をする。そうして床についてから床を上げるまでに、ほぼ一月の日数を潰してしまふ。

私の病氣と云えば、いつもきまつた胃の故障なので、いざとなると、絶食療法よりほかに手の着けようがなくなる。医者 の命令ばかりか、病氣の性質そのものが、私にこの絶食を余儀なくさせるのである。だから病み始めより回復期に向つた時の方が、余計やせこけてふらふらする。一カ月以上かかるのもおもにこの衰弱が崇<sup>た</sup>るからのように思われる。

私の立居<sup>たちい</sup>が自由になると、黒<sup>くろ</sup>柩<sup>わく</sup>のついた摺<sup>すり</sup>物<sup>もの</sup>が、時々私の机の上に載せられる。私は運命を苦笑する人のごとく、絹<sup>シルク</sup>帽<sup>ハット</sup>などを被<sup>かぶ</sup>つて、葬式の供に立つ、俣<sup>くま</sup>を駆<sup>か</sup>つて斎<sup>さい</sup>場<sup>じょう</sup>へ駈<sup>か</sup>けつける。死んだ人のうちには、御爺さんも御婆さんもあるが、時には私よりも年齒<sup>とし</sup>が若くつて、平生からその健康を誇つていた人も交<sup>まじ</sup>

っている。

私は宅へ帰って机の前に坐つて、人間の寿命は実に不思議なものだと思える。多病な私はなぜ生き残っているのだろうかと思つて見る。あの人はどういう訳で私より先に死んだのだろうかと思ふ。

私としてこういう黙想ふけに耽ふるのはむしろ当然だといわなければならぬ。けれども自分の位地いちや、身体からだや、才能おのや——すべて己れというもののおり所を忘れがちな人間の一人いちにんとして、私は死なないのが当り前だと思ひながら暮らしている場合が多い。読よ経きやうの間ですら、焼香うけいの際ですら、死んだ仏のあとに生き残つた、この私という形骸けいがいを、ちつとも不思議と心得ずに澄ましている

事が常である。

或人が私に告げて、「他の死ぬのは当り前のように見えるが、自分が死ぬという事だけはとても考えられません」と云った事がある。戦争に出た経験のある男に、「そんなに隊のものが続々斃れるのを見ていながら、自分だけは死なないと思っていられますか」と聞いたら、その人は「いられますね。おおかた死ぬまでは死なないと思ってるんでしょう」と答えた。それから大学の理科に關係のある人に、飛行機の話を聴かされた時に、こんな問答をした覚えもある。

「ああして始終しじゅう落ちたり死んだりしたら、後から乗るものは怖こわいだろうね。今度はおれの番だという気になりそうなものだが、

そうでないかしら」

「ところがそうでないと見えます」

「なぜ」

「なぜって、まるで反対の心理状態に支配されるようになるらしいのです。ヤツぱりあいつは墜落して死んだが、おれは大丈夫だという気になると見えますね」

私も恐らくこういう人の気分で、比較的平気にしていられるのだらう。それもそのはずである。死ぬまでは誰しも生きているのだから。

不思議な事に私の寝ている間には、黒<sup>くろ</sup>梓<sup>わく</sup>の通知がほとんど来ない。去年の秋にも病気が癒<sup>なお</sup>った後<sup>あと</sup>で、三四人の葬儀に列したの

である。その三四人の中に社の佐藤君も這入<sup>はい</sup>っていた。私は佐藤君がある宴会の席で、社から貰った銀盃<sup>ぎんぱい</sup>を持って来て、私に酒を勧め<sup>すす</sup>てくれた事を思い出した。その時彼の踊った変な踊もまだ覚えてい<sup>す</sup>る。この元気な崛<sup>くつきよう</sup>強<sup>つよ</sup>な人の葬式<sup>とむらい</sup>に行つた私は、彼が死んで私が生残つてい<sup>す</sup>るのを、別段の不思議とも思わずにいる時の方が多<sup>す</sup>い。しかし折々考えると、自分の生きてい<sup>す</sup>る方が不自然<sup>ふぜん</sup>のような心持にもなる。そうして運命がわざと私を愚弄<sup>ぐろう</sup>するのではないかしらと疑いたくなる。

## 二十三

今私の住んでいる近所に喜久井町きくいちょうという町がある。これは私の生れた所だから、ほかの人よりもよく知っている。けれども私が家を出て、方々漂ひょうろう浪なみして帰かへつて来た時には、その喜久井町がだいぶ広がって、いつの間にか根来ねごろの方まで延びていた。

私に縁故の深いこの町の名は、あまり聞き慣れて育つたせいか、ちつとも私の過去を誘い出す懐なつかしい響を私に与えてくれない。しかし書齋ひとに独り坐まつて、頬杖ほおづえを突いたまま、流れを下る舟のように、心を自由に遊ばせておくと、時々私の聯想れんそうが、喜久井町の四字にばかりと出会ったなり、そこでしばらくていかい徊し始める事がある。

この町は江戸と云つた昔には、多分存在していなかつたものら

しい。江戸が東京に改まった時か、それともずっと後のちになつてからか、年代はたしかに分らないが、何でも私の父が拵こしらえたものに相違ないのである。

私の家の定じようもん紋もんが井桁いげたに菊なので、それにちなんだ菊に井戸を使つて、喜久井町としたという話は、父自身の口から聴いたのか、または他のものから教おすわつたのか、何しろ今でもまだ私の耳に残つている。父は名主なぬしがなくなつてから、一時区長という役を勤めていたので、あるいはそんな自由も利きいたかも知れないが、それを誇ほこりにした彼の虚栄心を、今になつて考えて見ると、厭いやな心持は疾とくに消え去つて、ただ微笑したくなるだけである。

父はまだその上に自宅の前から南へ行く時に是非共登らなけれ

ばならない長い坂に、自分の姓の夏目という名をつけた。不幸にしてこれは喜久井町ほど有名にならずに、ただの坂として残っている。しかしこの間、或人が来て、地図でこの辺の名前を調べたら、夏目坂というのがあったと云って話したから、ことによると父の付けた名が今でも役に立っているのかも知れない。

私が早稲田わせだに帰って来たのは、東京を出てから何年ぶりになるだろう。私は今の住居すまいに移る前、家うちを探す目的であったか、また遠足の帰り路であったか、久しぶりで偶然私の旧家の横へ出た。その時表から二階の古ふる瓦がわらが少し見えたので、まだ生き残っているのかしらと思つたなり、私はそのまま通り過ぎてしまった。

早稲田に移ってから、私はまたその門前を通つて見た。表から

覗くと、何だかもとと変らないような気もしたが、門には思いも寄らない下宿屋の看板が懸かつていた。私は昔の早稲田田圃たんぼが見たかった。しかしそこはもう町になっていた。私は根来ねごろの茶ちや壱ぼたけと竹藪たけやぶを一目眺ひとめめたかった。しかしその痕こんせき迹はどこにも発見する事ができなかつた。多分この辺だろうと推測した私の見当けんとうは、当はずつていいのか、外はずれているのか、それさえ不明であつた。

私は茫ぼうぜん然ぜんとして佇立ちよりつした。なぜ私の家だけが過去の残ざん骸がいのごとくに存在くずしているのだろう。私は心のうちで、早くそれが崩くずれてしまえば好いのだと思つた。

「時」は力であつた。去年私が高田の方へ散歩したついでに、何気なくそこを通り過ぎると、私の家は綺麗きれいに取り壊されて、その

あとに新らしい下宿屋が建てられつつあった。その傍には質屋もできていた。質屋の前に疎らな囲をして、その中に庭木が少し植えてあった。三本の松は、見る影もなく枝を刈り込まれて、ほとんど畸形児のようになっていたが、どこか見覚のあるような心持を私に起させた。昔し「影参差松三本の月夜かな」と詠ったのは、あるいはこの松の事ではなかったろうかと考えつつ、私はまた家に帰った。

## 二十四

「そんな所に生い立って、よく今日まで無事にすんだものです

ね」

「まあどうかこうか無事にやつて来ました」

私達の使った無事という言葉は、男女なんによの間まに起る恋の波瀾はらんがないという意味で、云わば情事の反対を指さしたようなものであるが、私の追窮心ついきゆうしんは簡単なこの一句の答で満足できなかつた。

「よく人が云いますね、菓子屋へ奉公すると、いくら甘いもの好きな男でも、菓子いが厭いやになるって、御彼岸おひがに御萩おはぎなどを拵こしらえてるところを宅うちで見ても分るじゃありませんか、拵こしらえるものは、ただ御萩おしゆうを御重おしゆうに詰めるだけで、もうげんなりした顔かほをしていくくらいだから。あなたの場合もそんな訳わけなんですか」

「そういう訳わけでもないようです。とにかく甘歳はたち少し過ぎまでは平

「気でいたのですから」

その人はある意味において好男子であった。

「たといあなたが平気でいても、相手が平気でいない場合がないとも限らないじゃありませんか。そんな時には、どうしたって誘さそわれがちになるのが当り前でしょう」

「今からふり返つて見ると、なるほどこういう意味でああいう事をしたのだとか、あんな事を云つたのだとか、いろいろ思い当る事がないでもありません」

「じゃ全く気がつかずにいたのですね」

「まあそうです。それからこちらで気のついたのも一つありました。しかし私の心はどうしても、その相手に惹ひきつけられる事が

できなかつたのです」

私はそれが話の終りかと思つた。二人の前には正月の膳ぜんが据すえてあつた。客は少しも酒を飲まないし、私もほとんど盃さかずきに手を触れなかつたから、献酬けんしゅうというものは全くなかつた。

「それだけで今日まで経過して来られたのですか」と私は吸物をすすりながら念のために訊きいて見た。すると客は突然こんな話を私にして聞かせた。

「まだ使用人であつた頃に、ある女と二年ばかり会つていた事がありません。相手は無しろうと論素人ではないのでした。しかしその女はもういないのです。首を縊くくつて死んでしまつたのです。年は十九でした。十日ばかり会わないでいるうちに死んでしまつたのです。

その女にはね、旦那だんなが二人あつて、双方が意地いぢづくで、身受しんじうの金を競せり上げあひにかかつたのです。それに双方共老妓らうきを味方あじにして、こつちへ来い、あつちへ行くなと義理責ぎりせめにもしたらしいのです。

……」

「あなたはそれを救つてやる訳に行かなかつたのですか」

「当時の私は丁稚ていぢの少し毛はの生はえたようなもので、とてもどうもできないのです」

「しかしその芸妓げいしやはあなたのために死んだのじゃありませんか」

「さあ……。一度に双方の旦那だんなに義理ぎりを立てる訳に行かなかつたからかも知れませんが。……しかし私ら二人の間に、どこへも行かないという約束はあつたに違ちがひないのです」

「するとあなたが間接にその女を殺した事になるのかも知れませ  
んね」

「あるいはそうかも知れません」

「あなたは寢覚ねざめが悪かありませんか」

「どうも好くないのです」

元日に込み合こつた私の座敷は、二日になつて淋さびしいくらい静か  
であつた。私はその淋しい春の松の内に、こういう憐あわれな物語り  
を、その年賀の客から聞いたのである。客は真面目まじめな正直な人だ  
つたから、それを話すにも、ほとんど艶つやっぽい言葉を使わなかつ  
た。

## 二十五

私がまだ千駄木にいた頃の話だから、年数にすると、もうだいぶ古い事になる。

或日私は切通きりどおしの方へ散歩した帰りに、本郷四丁目の角へ出る代りに、もう一つ手前の細い通りを北へ曲った。その曲り角にはその頃あつた牛屋ぎゅうやの傍そばに、寄席よせの看板がいつでも懸かかっていた。雨の降る日だったので、私は無論傘かさをさしていた。それが鉄御てつお納戸なんどの八間はちけんの深張ふかぢやうで、上から洩もってくる雫しずくが、自然木じねんぼくの柄えを伝わって、私の手を濡ぬらし始めた。人通りの少ないこの小路こうじは、すべての泥を雨で洗い流したように、足駄あしだの齒はに引ひつ懸かかる汚きたない

ものはほとんどなかった。それでも上を見れば暗く、下を見れば  
侘<sup>わ</sup>びしかつた。始<sup>し</sup>終<sup>じゆう</sup>通りつけているせいでもあろうが、私の周  
囲には何一つ私の眼を惹<sup>ひ</sup>くものは見えなかつた。そうして私の心  
はよくこの天気とこの周囲に似ていた。私には私の心を腐<sup>ふ</sup>蝕<sup>しょく</sup>す  
るような不愉快<sup>ふげき</sup>な塊<sup>かたまり</sup>が常<sup>つね</sup>にあつた。私は陰<sup>いん</sup>鬱<sup>うつ</sup>な顔をしながら、  
ぼんやり雨の降る中を歩いていた。

ひかげちよう

よせ

日<sup>ひ</sup>蔭<sup>かげ</sup>町の寄<sup>よ</sup>席<sup>せき</sup>の前<sup>まへ</sup>まで来た私は、突然一台の幌<sup>ほろぐるま</sup> 俥<sup>りや</sup>に出<sup>で</sup>合<sup>あ</sup>

つた。私と俥の間には何の隔<sup>へだた</sup>りもなかつたので、私は遠くからそ  
の中に乗っている人の女だという事に気がついた。まだセルロイ  
ドの窓などのできない時分だから、車上の人は遠くからその白い  
顔を私に見せていたのである。

私の眼にはその白い顔が大変美しく映った。私は雨の中を歩きながらじつとその人の姿に見惚みとれていた。同時にこれは芸者だろ  
うという推察が、ほとんど事実のように、私の心に働らきかけた。  
すると俾びが私の一間ばかり前へ来た時、突然私の見ていた美しい  
人が、鄭てい寧ねいな会え釈しゃくを私にして通り過ぎた。私は微笑に伴なう  
その挨拶あいさつとともに、相手が、大塚楠緒おおつかくすおさんであつた事に、始  
めて気がついた。

次に会つたのはそれから幾いく日かめ目めだつたらうか、楠緒くすおさんが私に、  
「この間は失礼しました」と云つたので、私は私のありのままを  
話す気になつた。

「実はどこの美しくい方かたかと思つて見ていました。芸者じゃない

かしらとも考えたのです」

その時楠緒さんが何と答えたか、私はたしかに覚えていないけれども、楠緒さんはちつとも顔を赧あからめなかつた。それから不愉快な表情も見せなかつた。私の言葉をただそのままに受け取つたらしく思われた。

それからずっと経たつて、ある日楠緒さんがわざわざ早稲田へ訪ねて来てくれた事がある。しかるにあいにく私は妻さいと喧嘩けんかをしていた。私は厭いやな顔をしたまま、書齋にじつと坐っていた。楠緒さんは妻と十分ばかり話をして帰つて行つた。

その日はそれですんだが、ほどなく私は西片町へ詫あやまりに出かけた。

「実は喧嘩をしていたのです。妻も定めて無愛想でしたらう。私はまた苦々しい顔を見せるのも失礼だと思つて、わざと引込んでいたのです」

これに対する楠緒さんの挨拶も、今では遠い過去になつて、もう呼び出す事のできないほど、記憶の底に沈んでしまった。

楠緒さんが死んだという報知の来たのは、たしか私が胃腸病院にいる頃であつた。死去の広告中に、私の名前を使つて差支ないかと電話で問い合わせされた事などもまだ覚えてゐる。私は病院で「ある程の菊投げ入れよ棺の中」という手向の句を楠緒さんのために咏んだ。それを俳句の好きなある男が嬉しがつて、わざわざ私に頼んで、短冊に書かせて持つて行つたのも、もう昔になつ

てしまった。

## 二十六

益ますさんがどうしてそんなに零おちぶれ落たものか私には解らない。何しろ私の知っている益さんは郵便脚夫であつた。益さんの弟の庄さんも、家うちを潰つぶして私の所ところへ転ころがり込んで食いそ客そうろうになつていたが、これはまだ益さんよりは社会的地位が高かつた。小供の時分本町の鯛いわしや屋へ奉公に行つていた時、浜の西洋人が可愛かわいがつて、外国へ連れて行くと云つたのを断つたのが、今考えると残念だなどど始しじゆう終話していた。

二人とも私の母方の従兄いとこに当る男だったから、その縁故で、益さんは弟おととに会うため、また私の父に敬意を表するため、月に一遍ぐらいは、牛込の奥まで煎餅せんべいの袋などを手土産てみやげに持って、よく訪ねて来た。

益さんはその時何でも芝はすの外れか、または品川近くに世帯を持つて、一人暮しの呑気のんきな生活を営んでいたらしいので、宅うちへ来るとよく泊まって行つた。たまに帰ろうとすると、兄達が寄つてたかつて、「帰ると承知しないぞ」などと威嚇おどかしたものである。

当時二番目と三番目の兄は、まだ南校なんこうへ通つていた。南校と  
いうのは今の高等商業学校の位置にあつて、そこを卒業すると、  
開成学校すなわち今こんにち日の大学へ這入はいる組織そしよくになつていたもの

らしかった。彼らは夜になると、玄関に桐きりの机を並べて、明日あしたの下した読よみをする。下読と云ったところで、今の書生のやるのとはだいぶ違っていた。グードリツチの英国史といったような本を、一節ぐらいつつ読んで、それからそれを机の上へ伏せて、口の内で今読んだ通りを暗あん誦しやうするのである。

その下読が済むと、だんだん益さんが必要になつて来る。庄さんもいつの間にかそこへ顔を出す。一番目の兄も、機嫌きげんの好い時は、わざわざ奥から玄関まで出張でばつて来る。そうしてみんないつしよになつて、益さんに調戲からかい始める。

「益さん、西洋人の所へ手紙を配達する事もあるだろう」

「そりや商売だから厭いやだつて仕方がありません、持つて行きます

よ」

「益さんは英語ができるのかね」

「英語ができるくらいならこんな真似まねをしちやいけません」

「しかし郵便ツとか何とか大きな声を出さなくつちやならないだろう」

「そりや日本語で間に合いますよ。異人だつて、近頃は日本語が解りますもの」

「へええ、向むこうでも何とか云うのかね」

「云いますとも。ペロリの奥さんなんか、あなたよろしいありがとうと、ちゃんと日本語で挨拶あいさつをするくらいです」

みんなは益さんをここまでおびき出して、どつと笑うの

である。それからまた「益さん何て云うんだって、その奥さんは」と何遍も一つ事を訊きいては、いつまでも笑いの種たぐにしようと巧たくらんでかかる。益さんもしまいには苦笑いをして、とうとう「あなたよろしい」をやめにしてしまう。すると今度は「じゃ益さん、野中のなかの一本杉いっほんすぎをやつて御覧よ」と誰かが云い出す。

「やれつたつて、そうおいそれとやれるもんじゃありません」

「まあ好いから、おやりよ。いよいよ野中の一本杉の所まで参りますと……」

益さんはそれでもやにやして応じない。私はとうとう益さんの野中の一本杉というものを聴きかずにしまった。今考えると、それは何でも講釈か人にんじょう情じょう噺ばなしの一節いちせつじゃないかしらと思う。

私の成人する頃には益さんももう宅うちへ来なくなつた。おおかた死んだのだろう。生きていれば何か消息たよりのあるはずである。しかし死んだにしても、いつ死んだのか私は知らない。

## 二十七

私は芝居というものに余り親しみが無い。ことに旧劇は解らない。これは古来からその方面で発達して来た演芸上の約束を知らないので、舞台の上かいてんに開かいてん展てんされる特別の世界に、同化する能力が私に欠けているためだとも思う。しかしそればかりではない。私が旧劇を見て、最も異様に感ずるのは、役者が自然と不自然の

間を、どつちつかずにぶらぶら歩いている事である。それが私に、  
中ちゆうごし腰と云つたような落ちつけない心持を引き起させるのも恐  
らく理の当然なのだろう。

しかし舞台の上に子供などが出て来て、甲かんの高い声で、憐あわれつ  
ぽい事などを云う時には、いかな私でも知らず知らず眼に涙にじが滲  
み出る。そうしてすぐ、ああ騙だまされたなと後悔する。なぜあんな  
に安やすつぽい涙を零こぼしたのだろうと思う。

「どう考えても騙だまされて泣くのは厭いやだ」と私はある人に告げた。  
芝居好のその相手は、「それが先生の常態なのでしよう。平生涙  
を控ひかえ目めにしているのは、かえつてあなたによそゆきじやありま  
せんか」と注意した。

私はその説に不服だったので、いろいろの方面から向を納得させようとしているうちに、話題がいつか絵画の方に滑つて行つた。その男はこの間参考品として美術協会に出た若冲の御物を大變に嬉しがって、その評論をどこかの雑誌に載せるとかいう噂であつた。私はまたあの鶏の図がすこぶる気に入らなかつたので、ここでも芝居と同じような議論が二人の間に起つた。

「いったい君に画を論ずる資格はないはずだ」と私はついに彼を罵倒した。するとこの一言が本になつて、彼は芸術一元論を主張し出した。彼の主意をかいつまんで云うと、すべての芸術は同じ源から湧いて出るのだから、その内の一つさえうんと腹に入れておけば、他は自ずから解し得られる理窟だといふのである。座

にいる人のうちで、彼に同意するものも少なくなかった。

「じゃ小説を作れば、自然柔道も旨うまくなるかい」と私が笑じょうだん談だん半分はんぶんに云った。

「柔道は芸術じゃありませんよ」と相手も笑いながら答えた。

芸術は平等観から出立するのではない。よしそこから出立するにしても、差別観さべつかんに入いって始めて、花が咲くのだから、それを本来の昔へ返せば、絵も彫刻も文章も、すっかり無に帰してしまふ。そこに何で共通のものがあるう。たとい有ったにしたところで、実際の役には立たない。彼我共通の具体的なものなどの発見もできるはずがない。

こういうのがその時の私の論旨ろんしであつた。そうしてその論旨は

けつして充分なものではなかった。もっと先方の主張を取り入れて、周到な解釈を下してやる余地はいくらでもあったのである。

しかしその時座にいた一人が、突然私の議論を引き受けて相手に向い出したので、私も面倒だからついそのままにしておいた。けれども私の代りになったその男というのはだいぶ酔っていた。それで芸術がどうだの、文芸がどうだのと、しきりに弁ずるけれども、あまり要領を得た事は云わなかった。言葉遣いさえ少しへべれけであった。初めのうちは面白がって笑っていた人達も、ついには黙ってしまった。

「じゃ絶交しよう」などと酔った男がしまい云い出した。私は「絶交するなら外でやってくれ、ここでは迷惑だから」と注意し

た。

「じゃ外へ出て絶交しようか」と酔った男が相手に相談を持ちかけたが、相手が動かないので、とうとうそれぎりになってしまった。

これは今年の元日の出来事である。酔った男はそれからちよいちよい来るが、その時の喧嘩けんかについては一口も云わない。

## 二十八

ある人が私の家の猫うちを見て、「これは何代目の猫ですか」と訊きいた時、私は何気なく「二代目です」と答えたが、あとで考える

と、二代目はもう通り越して、その実三代目になっていた。

初代は宿なしであつたにかかわらず、ある意味からして、だいぶ有名になつたが、それに引きかえて、二代目の生涯は、主人にさえ忘れられるくらい、短命だつた。私は誰がそれをどこから貰つて来たかよく知らない。しかし手の掌に載せれば載せられるような小さい恰好をして、彼がそこいら中這い廻つていた當時を、私はまだ記憶している。この可憐な動物は、ある朝家のものが床を揚げる時、誤つて上から踏み殺してしまつた。ぐうという声が出たので、蒲団の下に潜り込んである彼をすぐ引き出して、相当の手当をしたが、もう間に合わなかつた。彼はそれから一日二日してついに死んでしまつた。その後へ来たのがすなわち

真黒な今の猫である。

私はこの黒猫を可愛<sup>かわい</sup>がっても憎<sup>にく</sup>がってもいない。猫の方でも宅<sup>うち</sup>中<sup>ちゅう</sup>のそのそ歩き廻るだけで、別に私の傍<sup>そば</sup>へ寄りつこうという

好意を現わした事がない。

ある時彼は台所の戸棚<sup>とだな</sup>へ這入つて、鍋<sup>なべ</sup>の中へ落ちた。その鍋の中には胡麻<sup>ごま</sup>の油がいっぱいあつたので、彼の身体<sup>からだ</sup>はコスメチックでも塗りつけたように光り始めた。彼はその光る身体で私の原稿紙の上に寝たものだから、油がずっと下まで滲<sup>し</sup>み通<sup>とお</sup>つて私をずいぶんな目に逢<sup>あ</sup>わせた。

去年私の病気をする少し前に、彼は突然皮膚病<sup>かか</sup>に罹<sup>か</sup>つた。顔から額へかけて、毛がだんだん抜けて来る。それをしきりに爪で搔<sup>か</sup>

くものだから、瘡蓋かさぎふたがぼろぼろ落ちて、痕あとが赤裸あかはだかになる。

私はある日食事中この見苦しい様子を眺めて厭いやな顔をした。

「ああ瘡蓋かさぎふたを零こぼして、もし小供にでも伝染するといけないから、病院へ連れて行って早く療治をしてやるがいい」

私は家うちのものにこういったが、腹の中では、ことによると病気が病気だから全治しまいとも思った。昔むかし私の知っている西洋人が、ある伯爵から好い犬を貰もらって可愛かわいがっていたところ、いつかこんな皮膚病に悩まされ出したので、気の毒だからと云って、医者に頼んで殺して貰もらった事を、私はよく覚えていたのである。

「クロロフォームか何かで殺してやった方が、かえって苦痛がな  
くって仕合せだろう」

私は三四度同じ言葉を繰り返して見たが、猫がまだ私の思う通りにならないうちに、自分の方が病気でどつと寝てしまった。

その間私はついに彼を見る機会をもたなかった。自分の苦痛が直接自分を支配するせいか、彼の病気を考える余裕さえ出なかった。

十月に入つて、私はようやく起きた。そうして例のごとく黒い彼を見た。すると不思議な事に、彼の醜い赤裸の皮膚にもとのような黒い毛が生えかかっていた。

「おや癒なおるのかしら」

私は退屈な病後の眼を絶えず彼の上に注いでいた。すると私の衰弱がだんだん回復するにつれて、彼の毛もだんだん濃くなつて来た。それが平生の通りになると、今度は以前より肥え始めた。

私は自分の病気の経過と彼の病気の経過とを比較して見て、時々そこに何かの因縁いんねんがあるような暗示を受ける。そうしてすぐその後から馬鹿らしいと思つて微笑する。猫の方ではただにやにや鳴くばかりだから、どんな心持でいるのか私にはまるで解らない。

## 二十九

私は両親の晩年になつてできたいわゆる末すえ子こである。私を生んだ時、母はこんな年とし齒しをして懐妊するのは面目ないと云つたとかいう話が、今でも折々は繰くり返かえされている。

単にそのためばかりでもあるまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里にやってしまった。その里というのは、無論私の記憶に残っているはずがないけれども、成人の後のち聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世とせいにしていた貧しい夫婦ものであったらしい。

私はその道具屋の我楽多がらくたといっしよに、小さい筈ざるの中に入れて、毎晩四谷よつやの大通りの夜店に曝さらされていたのである。それをある晩私の姉が何かのついでにそこを通りかかった時見つけて、かわいそう可哀想とでも思ったのだろう、ふところ懐へ入れて宅うちへ連れて来たが、私はその夜どうしても寝つかずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいので、姉は大いに父から叱しかられたそうである。

私はいつ頃ごころその里から取り戻されたか知らない。しかしじきまたある家へ養子にやられた。それはたしか私の四つの歳であつたように思う。私は物心のつく八九歳までそこで成長したが、やがて養家に妙なごたごたが起つたため、再び実家へ戻るような仕儀となつた。

浅草から牛込へ遷うつされた私は、生れた家うちへ歸つたとは気がつかずに、自分の両親をもと通り祖父母とのみ思つていた。そうして相変らず彼らを御爺おじいさん、御婆おばあさんと呼んで毫ごうも怪しまなかつた。  
向むこうでも急に今までの習慣を改めるのが変だと考えたものか、私にそう呼ばれながら澄すえました顔をしていた。

私は普通の末すえツ子このようにつけて両親から可愛かわいがられなかつ

た。これは私の性質が素直すなおでなかったためだの、久しく両親に遠ざかっていたためだの、いろいろの原因から来ていた。とくに父からはむしろ苛酷かこくに取扱かわれたという記憶がまだ私の頭に残っている。それだのに浅草から牛込へ移された当時の私は、なぜか非常に嬉うれしかった。そうしてその嬉しさが誰の目にもつくくらいに著るしく外へ現われた。

馬鹿な私は、本当の両親を爺婆じじばばとのみ思い込んで、どのくらいの月日を空くうに暮らしたものだろう、それを訊きかれるとまるで分らないが、何でも或夜こんな事があつた。

私がひとり座敷に寝ていると、枕元の所で小さな声を出して、しきりに私の名を呼ぶものがある。私は驚ろいて眼を覚さましたが、

あたりが真暗なので、誰がそこに蹲踞うづくまっているのか、ちよつと判断がつかなかった。けれども私は小供だからただじつとして先方の云う事だけを聞いていた。すると聞いているうちに、それが私の家の下女の声である事に気がついた。下女は暗い中で私に耳みみみこすり語ことばをするようにこういのである。――

「あなたが御爺さん御婆さんだと思つていらつしやる方は、本当はあなたの御父おとつさんと御母おつかさんなのですよ。先刻さつきね、おおかたそのせいであんなにこっちの宅うちが好なんだろう、妙なものだな、と云つて二人で話していらしつたのを私が聞いたから、そつとあなたに教えて上げるんですよ。誰にも話しちやいけませんよ。よござんすか」

私はその時ただ「誰にも云わないよ」と云ったぎりだったが、心の中では大変嬉しかった。そうしてその嬉しさは事実を教えてくれたからの嬉しさではなくって、単に下女が私に親切だったからの嬉しさであった。不思議にも私はそれほど嬉しく思った下女の名も顔もまるで忘れてしまった。覚えているのはただその人の親切だけである。

## 三十

私がこうして書齋に坐つてしていると、来る人の多くが「もう御病おなほ気はすっかり御癒りですか」と尋ねてくれる。私は何度も同じ質

問を受けながら、何度も返答に躊躇ちゆうちよした。そうしてその極きよくいつでも同じ言葉を繰くり返かえすようになった。それは「ええまあどうかこうか生きています」という変な挨拶あいさつに異ことならなかつた。

どうかこうか生きている。——私はこの一句を久しい間使用した。しかし使用するごとに、何だか不穩ふおんとう当な心持がするので、自分でも実はやめられるならばと思つて考えてみたが、私の健康状態を云い現わすべき適当な言葉は、他たにどうしても見つからなかつた。

ある日T君が来たから、この話をして、癒なおつたとも云えず、癒らないとも云えず、何と答えて好いか分らないと語つたら、T君はすぐ私にこんな返事をした。

「そりや癒つたとは云われませんね。そう時々再発するようじゃ。まあもとの病気の継続なんでしょう」

この継続という言葉聞いた時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以後は、「どうかこうか生きています」という挨拶あいさつをやめて、「病気はまだ継続中です」と改ためた。そうしてその継続の意味を説明する場合には、必ず歐洲の大乱を引ひ合きあいに出した。

「私はちようど独乙ドイツが聯合軍れんごうぐんと戦争をしているように、病気と戦争をしているのです。今こうやってあなたと対坐たいざしていられるのは、天下が太平になったからではないので、塹壕ざんごうの中うちに這入はいって、病気と睨めにらつくらをしているからです。私の身体からだは乱世で

す。いつどんな変へんが起らないとも限りません」

或人は私の説明を聞いて、面白そうにははと笑った。或人は黙っていた。また或人は気の毒らしい顔をした。

客の帰ったあとで私はまた考えた。——継続中のものはおそろく私の病氣ばかりではないだろう。私の説明を聞いて、笑じょうだん談

だと思つて笑う人、解らないで黙っている人、同情の念に駆かられて気の毒らしい顔をする人、——すべてこれらの人の心の奥には、私の知らない、また自分達さえ気のつかない、継続中のものがいくらでも潜ひそんでいるのではなからうか。もし彼らの胸に響くような大きな音で、それが一度に破裂したら、彼らははたしてどう思うだろう。彼らの記憶はその時もはや彼らに向つて何物をも語ら

ないだろう。過去の自覚はとくに消えてしまっているだろう。今と昔とまたその昔の間に何らの因果を認める事のできない彼らは、そういう結果に陥おちいった時、何と自分を解釈して見る気だろう。所しよせん詮我々は自分で夢の間に製ま造した爆裂弾を、思い思いに抱いだきながら、一人残らず、死という遠い所へ、談笑しつつ歩いて行くのではなからうか。ただどんなものを抱だいているのか、他ひとも知らず自分も知らないのです、仕合せなんでしょう。

私は私の病気が継続であるという事に気がついた時、歐洲の戦争もおそらくいつの世からかの継続だろうと考えた。けれども、それがどこからどう始まって、どう曲折して行くかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉を解しない一般の人を、私

はかえつて羨ましく思っている。

## 三十一

私がまだ小学校に行っていた時分に、喜いちちゃんという仲のいい友達があつた。喜いちちゃんは当時中町の叔父さんの宅にいたので、そう道程の近くない私の所からは、毎日会いに行く事が出来悪かつた。私はおもに自分の方から出かけないで、喜いちちゃんの来るのを宅で待っていた。喜いちちゃんはいくら私が行かないでも、きつと向うから来るにきまつていた。そうしてその来る所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を売る松さんの許であつた。

喜いちちゃんには父母ちちははがないようだったが、小供の私には、それがいつこう不思議とも思われなかった。おそらく訊きいて見た事もなかったろう。したがって喜いちちゃんがなぜ松さんの所へ来るのか、その訳さえも知らずにいた。これはずっと後で聞いた話であるが、この喜いちちゃんの御父おとつさんというのは、昔むかし銀座の役人か何かをしていた時、贖にせがね金を造ったとかいう嫌疑けんぎを受けて、入じゅう牢ろうしたまま死んでしまったのだという。それであとに取り残された細君が、喜いちちゃんを先夫せんぷの家へ置いたなり、松さんの所へ再縁したのだから、喜いちちゃんが時々うみ生の母に会いに来るのは当り前の話であった。

何にも知らない私は、この事情を聞いた時ですら、別段変な感

じも起きなかつたくらいだから、喜いちやんとふざけまわつて遊ぶ頃に、彼の境遇などを考えた事はただの一度もなかつた。

喜いちやんも私も漢学が好きだったので、解りもしない癖くせに、よく文章の議論などをして面白がつた。彼はどこから聴いてくるのか、調べてくるのか、よくむずかしい漢籍の名前などを挙あげて、私を驚ろかす事が多かつた。

彼はある日私の部屋同様になつてゐる玄関たしかに上り込んで、懐ふところから二冊つづきの書物を出して見せた。それは確たしかに写本であつた。しかも漢文で綴つづつてあつたように思う。私は喜いちやんから、その書物を受け取つて、無意味にそこここを引ひつ繰くり返かえして見ている。実は何が何だか私にはさっぱり解らなかつたのである。しか

し喜いちやんは、それを知ってるかなどと露骨な事をいう性質たちではなかつた。

「これは太田南畝おおたなんぼの自筆なんだがね。僕の友達がそれを売りたいというので君に見せに来たんだが、買ってやらないか」

私は太田南畝という人を知らなかつた。

「太田南畝っていったい何だい」

「蜀山人しよくさんじんの事さ。有名な蜀山人さ」

無学な私は蜀山人という名前さえまだ知らなかつた。しかし喜いちやんにそう云われて見ると、何だか貴重の書物らしい気がした。

「いくらなら売るのがかい」と訊きいて見た。

「五十銭に売りたいと云うんだがね。どうだろう」

私は考えた。そうして何しろ価値ねぎ切つて見るのが上策だと思いついた。

「二十五銭なら買つても好い」

「それじゃ二十五銭でも構わないから、買つてやりたまえ」

喜いちちゃんはこう云いつつ私から二十五銭受取つておいて、またしきりにその本の効能を述べ立てた。私には無論その書物が解らないのだから、それほど嬉うれしくもなかつたけれども、何しろ損はしないだろうというだけの満足はあった。私はその夜南なんぼしゆう畝あし莠げん言——たしかそんな名前だと記憶しているが、それを机の上うへに載せて寝た。

## 三十二

翌日あくるひになると、喜いちちゃんがまたぶらりとやって来た。

「君昨日きのう買つて貰つた本の事だね」

喜いちちゃんはそれだけ云つて、私の顔を見ながらぐずぐずしている。私は机の上に乗せてあつた書物に眼を注いだ。

「あの本かい。あの本がどうかしたのかい」

「実はあすこの宅うちの阿爺おやしに知れたものだから、阿爺が大変怒つてね。どうか返して貰つて来てくれつて僕に頼むんだよ。僕も一遍君に渡したもんだから厭いやだったけれども仕方がないからまた来た

のさ」

「本を取りにかい」

「取りにつて訳でもないけれども、もし君の方で差支がないなら、返してやってくれないか。何しろ二十五銭じゃ安過ぎるつていうんだから」

この最後の一言で、私は今まで安く買い得たという満足の裏に、ぼんやり潜んでいた不快、——不善の行為から起る不快——を判然自覚し始めた。そうして一方では狡猾私を怒ると共に、一方では二十五銭で売った先方を怒った。どうしてこの二つの怒りを同時に和らげたものだろう。私は苦い顔をしてしばらく黙っていた。

私のこの心理状態は、今の私が小供の時の自分を回顧して解剖するのだから、比較的明めいりよう瞭りょうに描き出されるようなものの、その場合の私にはほとんど解らなかつた。私さえただ苦い顔をしたという結果だけしか自覚し得なかつたのだから、相手の喜いちやんには無論それ以上解わかるはずがなかつた。括弧かっこの中なかでいうべき事かも知れないが、年齢としを取とつた今こんにち日ひでも、私にはよくこんな現象げんじょうが起おつてくる。それでよく他ひとから誤解ごかいされる。

喜いちちゃんは私の顔を見て、「二十五銭では本当に安過ぎるんだとき」と云いつた。

私はいきなり机の上に載せておいた書物を取とつて、喜いちちゃんの前に突き出した。

「じゃ返そう」

「どうも失敬した。何しろ安公やすこうの持つてるものでないんだから仕方がない。阿爺おやしの宅うちに昔からあつたやつを、そつと売つて小遣こづかにしようつて云うんだからね」

私はぷりぷりして何とも答えなかつた。喜いちやんふところは袂ふところから二十五銭出して私の前へ置きかけたが、私はそれに手を触れようともしなかつた。

「その金なら取らないよ」

「なぜ」

「なぜでも取らない」

「そうか。しかしつまらないじゃないか、ただ本だけ返すのは。」

本を返すくらいなら二十五銭も取りたまいな」

私はたまらなくなつた。

「本は僕のものだよ。いったん買った以上は僕のものにきまつてるじゃないか」

「そりやそうに違いない。違いないが向の宅むこううちでも困つてるんだから」

「だから返すと云つてるじゃないか。だけど僕は金を取る訳がないんだ」

「そんな解らない事を云わずに、まあ取っておきたまいな」

「僕はやるんだよ。僕の本だけでも、欲しければやろうというんだよ。やるんだから本だけ持つてつたら好いじゃないか」

「そうかそんなら、そうしよう」

喜いちやんは、とうとう本だけ持って帰った。そうして私は何の意味なしに二十五銭の小遣を取られてしまったのである。

### 三十三

世の中に住む人間の一人いちにんとして、私は全く孤立して生存する訳に行かない。自然他ひとと交渉の必要がどこからか起ってくる。時候あいさつの挨拶、用談、それからもつと込み入こった懸合かけあい——これらから脱却する事は、いかに枯淡な生活を送っている私にもむずかしいのである。

私は何でも他のひという事を真まに受けて、すべて正面から彼らの言語動作を解釈すべきものだろうか。もし私が持つて生れたこの単純な性情に自己を託して顧かえりみないとすると、時々飛んでもない人から騙だまされる事があるだろう。その結果蔭かげで馬鹿にされたり、冷評やかされたりする。極端な場合には、自分の面前でさえ忍ぶべからざる侮辱を受けないとも限らない。

それでは他はみな擦すれ枯からしの嘘うそ吐つきばかりと思つて、始めから相手の言葉に耳も借かさず、心も傾かたむけず、或時はその裏面ひそに潜ひそんでいるらしい反対の意味だけを胸に収めて、それで賢かしこい人だと自分を批評し、またそこに安住の地を見出し得るだろうか。そうすると私は人を誤解しないとも限らない。その上恐るべき過失を犯

す覚悟を、初手しよてから仮定して、かからなければならぬ。或時は必然の結果として、罪のない他を侮辱するくらいの厚顔を準備しておかなければ、事が困難になる。

もし私の態度をこの両面のどつちかに片づけようとすると、私の心にまた一種の苦悶くもんが起る。私は悪い人を信じたくない。それからまた善い人よを少しでも傷きずけたくない。そうして私の前に現われて来る人は、ことごとく悪人でもなければ、またみんな善人とも思えない。すると私の態度も相手しだいでいろいろに変わって行かなければならぬのである。

この変化は誰にでも必要で、また誰でも実行している事だろうと思うが、それがはたして相手にぴたりと合つて寸分間違のない

微妙な特殊な線の上をあぶなげもなく歩いているだろうか。私の大いなる疑問は常にそこに蟠わだかまっている。

私の僻ひがみを別にして、私は過去において、多くの人から馬鹿にされたという苦にがい記憶をもっている。同時に、先方の云う事や為する事を、わざと平たく取らずに、暗あんにその人の品性に恥を搔かかしたと同じような解釈をした経験もたくさんありはしまいかと思う。

他ひとに対する私の態度はまず今までの私の経験から来る。それから前後の關係と四圍の状況から出る。最後に、曖あいまい昧な言葉ではあるが、私が天から授かった直覚が何分か働らく。そうして、相手に馬鹿にされたり、また相手を馬鹿にしたり、稀まれには相手に彼相当な待遇を与えたりしている。

しかし今までの経験というものは、広いようで、その実はなほだ狭い。ある社会の一部分で、何度となく繰り返された経験を、他の一部分へ持つて行くと、まるで通用しない事が多い。前後の関係とか四囲の状況とか云ったところで、千差万別なのだから、その応用の区域が限られているばかりか、その実千差万別に思慮を廻めぐらさなければ役に立たなくなる。しかもそれを廻らす時間も、材料も充分給与されていない場合が多い。

それで私はともすると事実あるのだから、またないのだから解らない、極めてあやふやな自分の直覚というものを主位に置いて、他を判断したくなる。そうして私の直覚がはたして当ったか当らないか、要するに客觀的事実によって、それを確たしかめる機会をもたな

い事が多い。そこにまた私の疑いが始終靄しじゅうもやのようにかかつて、私の心を苦しめている。

もし世の中に全知全能ぜんちぜんのうの神があるならば、私はその神の前に跪ひざまずいて、私に毫髪ごうはつの疑うたがひを挟はさむ余地もないほど明らかな直覺を与えて、私をこの苦悶くもんから解脱げだつせしめん事を祈る。でなければ、この不明な私の前に出て来るすべての人を、玲瓏透徹れいろとうてつな正直ものに変化して、私とその人との魂がぴたりと合うような幸福を授けたまわん事を祈る。今の私は馬鹿で人に騙だまされるか、あるいは疑い深くて人を容ゆるめる事ができないか、この両方だけしかないような気がする。不安で、不透明で、不愉快ふみに充ちている。もしそれが生しょう涯がいつづくとするならば、人間とはどんなに不幸なも

のだろう。

### 三十四

私が大学にいる頃教えたある文学士が来て、「先生はこの間高等工業で講演をなすつたそうですね」というから、「ああやった」と答えると、その男が「何でも解らなかつたようですよ」と教えてくれた。

それまで自分の云つた事について、その方面の掛念けねんをまるでもつていなかつた私は、彼の言葉を聞くとひとしく、意外の感に打たれた。

「君はどうしてそんな事を知ってるの」

この疑問に対する彼の説明は簡単であつた。親戚だか知人だか知らないが、何しろ彼に關係のある或家うちの青年が、その学校に通つていて、当日私の講演を聴いた結果を、何だか解らないという言葉で彼に告げたのである。

「いったいどんな事を講演なすつたのですか」

私は席上で、彼のためにまたその講演の梗こうがいを繰くり返かえした。

「別にむずかしいとも思えない事だろう君。どうしてそれが解らないかしら」

「解らないでしょう。どうせ解りやしません」

私には断乎だんこたるこの返事がいかにも不思議に聞こえた。しかし

それよりもなお強く私の胸を打ったのは、止せばよかつたという後悔の念であつた。自白すると、私はこの学校から何度となく講演を依頼されて、何度となく断つたのである。だからそれを最後に引き受けた時の私の腹には、どうかしてそこに集まる聴衆に、相当の利益を与えたいという希望があつた。その希望が、「どうせ解りやしません」という簡単な彼の一言いちごんで、みごとに粉砕ふんさいされてしまつて見ると、私はわざわざ浅草まで行く必要がなかつたのだと、自分を考えない訳に行かなかつた。

これはもう一二年前の古い話であるが去年の秋またある学校で、どうしても講演をやらなければ義理が悪い事になつて、ついにそこへ行つた時、私はふと私を後悔させた前年を思い出した。それ

に私の論じたその時の題目が、若い聴衆の誤解を招きやすい内容を含んでいたので、私は演壇を下りる間際にまぎわこう云った。――

「多分誤解はないつもりですが、もし私の今御話したうちに、判はつきり

然しないところがあるなら、どうぞ私宅まで来て下さい。できるだけあなたがたに御納得ごなつとくの行くように説明して上げるつもりですから」

私のこの言葉が、どんな風に反響をもたらすだろうかという予期は、当時の私にはほとんど無かったように思う。しかしそれから四五日経たつて、三人の青年が私の書齋に這はい入つて来たのは事実である。そのうちの二人は電話で私の都合を聞き合せた。一人は鄭寧ていねいな手紙を書いて、面会の時間を拵こしらえてくれと注文して来た。

私は快よくそれらの青年に接した。そうして彼らの来意を確かめた。一人の方は私の予想通り、私の講演についての筋道の質問であつたが、残る二人の方は、案外にも彼らの友人がその家庭に對して採るべき方針についての疑義を私に訊こうとした。したがつてこれは私の講演を、どう実社会に應用して好いかという彼らの目前に逼つた問題を持つて来たのである。

私はこれら三人のために、私の云うべき事を云い、説明すべき事を説明したつもりである。それが彼らにどれほどの利益を与えたか、結果からいうとこの私にも分らない。しかしそれだけにしたところで私には満足なのである。「あなたの講演は解らなかつたそうです」と云われた時よりも遙に満足なのである。

「この稿が新聞に出た二三日あとで、私は高等工業の学生から四五通の手紙を受取った。その人々はみんな私の講演を聴いたものばかりで、いずれも私がここで述べた失望を打ち消すような事実を、反証として書いて来てくれたのである。だからその手紙はみな好意に充ちていた。なぜ一学生の云った事を、聴衆全体の意見として速断するかなどという詰問的のものは一つもなかった。それで私はここに一言を附加して、私の不明を謝し、併せて私の誤解を正してくれた人々の親切をありがたく思う旨を公けにするのである。」

## 三十五

私は小供の時分よく日本橋の瀬戸物町せとものちようにある伊勢本いせもとという寄席せへ講釈を聴きに行った。今の三越の向側むこうがわにいつでも昼席の看板がかかっている、その角かどを曲ると、寄席はつい小半町行くか行かない右手にあつたのである。

この席は夜になると、色物いろものだけしかかけないので、私は昼よりほかに足を踏み込んだ事がなかつたけれども、席数からいうと一番多く通つた所かよのように思われる。当時私のいた家は無論高田の馬場の下ではなかつた。しかしいくら地理の便が好かつたからと云つて、どうしてあんなに講釈を聴きに行く時間が私にあつたものか、今考えるとむしろ不思議なくらいである。

これも今からふり返つて遠い過去を眺めるせいでもあらうが、そこは寄席としてはむしろ上品な気分を客に起させるようにできていた。高座こうざの右側みぎわきには帳場格子ちやうばこうしのような仕切しきりを二方に立て廻して、その中に定連じやうれんの席が設けてあつた。それから高座の後うしろが縁側えんがわで、その先がまた庭になつていた。庭には梅の古木が斜ななめに井桁いげたの上に突き出たりして、窮屈な感じのしないほどの大空が、縁から仰がれるくらいに余分の地面を取り込んでいた。その庭を東に受けて離れ座敷のような建物も見えた。

帳場格子のうちにいる連中は、時間が余つて使い切れない有福な人達なのだから、みんな相応な服装なりをして、時々吞氣のんきそうに袂たもとから毛拔けぬきなどを出して根気よく鼻毛を抜いていた。そんな長閑のどかな

日には、庭の梅の樹きうぐいすに鶯うぐいすが来て啼なくような気持もした。

なかいり中入になると、菓子かしを箱入のまま茶を売る男が客の間へ配つ

て歩くのがこの席の習慣になっていた。箱は浅い長方形のもので、まず誰でも欲しいと思う人の手の届く所に一つと云った風に都合よく置かれるのである。菓子かしの数は一箱に十ぐらいの割だったかと思うが、それを食べたいだけ食べて、後からその代価を箱の中に入れるのが無言の規約になっていた。私はその頃この習慣を珍らしいもののように興おもしろがって眺めていたが、今となって見ると、こうした鷹揚おうようで呑気のんきな気分は、どこの人寄場ひとよせばへ行つても、もう味あじわう事ができまいと思うと、それがまた何となく懐なつかしい。

私はそんなおつとりと物寂ものさびた空気の中で、古めかしい講釈と

いうものをいろいろの人から聴いたのである。その中には、すと  
とこ、のんのん、ずいずい、などという妙な言葉を使う男もいた。  
これは田たなべなんりゆう辺南竜と云つて、もとはどこかの下足番であつたと  
かいう話である。そのすところ、のんのん、ずいずいははなはだ  
有名なものであつたが、その意味を理解するものは一人もなかつ  
た。彼はただそれを軍勢の押し寄せる形容詞として用いていたら  
しいのである。

この南竜はとつくの昔に死んでしまつた。そのほかのものもた  
いていは死んでしまつた。その後の様子ごをまるで知らない私には、  
その時分私を喜ばせてくれた人のうちで生きているものがはた  
して何人あるのだから全く分らなかつた。

ところがいつか美音会の忘年会のあった時、その番組を見たら、吉原のたいこもち 間の茶番だの何だのが列べて書いてあるうちに、私はたつた一人の当時の旧友を見出した。私は新富座へ行つて、その人を見た。またその声を聞いた。そうして彼の顔も咽喉のども昔とちつとも變つていないのに驚ろいた。彼の講釈も全く昔の通りであつた。進歩もしない代りに、退歩もしていなかつた。廿世紀のこの急劇な變化を、自分と自分の周囲に恐ろしく意識しつつあつた私は、彼の前に坐りながら、絶えず彼と私とを、心のうちで比較して一種の黙想ふけに耽つていた。

彼というのはばきん馬琴の事で、昔伊勢本いせもとで南竜の中入前をつとめていた頃には、きんりょう琴凌と呼ばれた若手だったのである。

## 三十六

私の長兄はまだ大学とまらない前の開成校かいせいこうにいたのだが、肺わづらを患わづらつて途中で退学してしまった。私とはだいぶ年齒としが違うので、兄弟としての親しみよりも、大人おとな対小供としての関係の方が、深く私の頭に浸しみ込こんでいる。ことに怒おこられた時はそうした感じが強く私を刺戟しげきしたように思う。

兄は色の白い鼻筋の通った美しくい男であつた。しかし顔だちから云つても、表情から見ても、どこかに峻けわしい相そうを具そうえていて、むやみに近寄れないと云つた風の逼せまつた心持を他ひとに与よつた。

兄の在学中には、まだ地方から出て来た貢進生こうしんせいなどのいる頃だったのだ、今の青年には想像のできないような気風が校内のそこここに残っていたらしい。兄は或上級生に艶書ふみをつけられたと云つて、私に話した事がある。その上級生というのは、兄などよりもずっと年齒上としうえの男であつたらしい。こんな習慣の行なわれないうちで育つた彼は、はたしてその文ふみをどう始末したものだろう。兄はそれ以後学校の風呂でその男と顔を見合わせるたびに、きまりの悪い思をして困つたと云つていた。

学校を出た頃の彼は、非常に四角四面で、始終しじゆう堅苦しく構えていたから、父や母も多少彼に気をおく様子が見えた。その上病気のせいでもあろうが、常に陰氣臭いんきくさい顔をして、宅うちにばかり引ひ

込んでいた。

それがいつとなく融けて来て、人柄が自ずと柔らかになつた  
 と思うと、彼はよく古渡唐棧の着物に角帯などを締めて、  
 夕方から宅を外にし始めた。時々は紫色で亀甲型を一面に  
 摺つた亀清の団扇などが茶の間に放り出されるようになった。  
 それだけならまだ好いが、彼は長火鉢の前へ坐つたまま、しき  
 りに仮色を遣い出した。しかし宅のものは別段それに頓着  
 する様子も見えなかつた。私は無論平氣であつた。仮色と同時  
 に藤八拳も始まつた。しかしこの方は相手が要るので、そう毎  
 晩は繰り返されなかつたが、何しろ変に無器用な手を上げたり下  
 げたりして、熱心にやっていた。相手はおもに三番目の兄が勤め

ていたようである。私は真面目な顔をして、ただ傍観しているに過ぎなかつた。

この兄はとうとう肺病で死んでしまった。死んだのはたしか明治二十年だと覚えている。すると葬式も済み、待夜も済んで、まひとかたづきず一片付というところへ一人の女が尋ねて来た。三番目の兄が出て応接して見ると、その女は彼にこんな事を訊いた。

「兄さんは死ぬまで、奥さんを御持ちになりましたやしませんか」

兄は病氣のため、生しょうがい涯妻帯しなかつた。

「いいえしまいまで独身で暮らしていました」

「それを聞いてやつと安心しました。妾わたくしのようなものは、どうせ旦那だんながなくなつちや生きて行かれないから、仕方ありませんけれ

ども、……」

兄の遺骨の埋められた寺の名を教わって帰って行つたこの女は、わざわざ甲州から出て来たのであるが、元柳橋の芸者をしている頃、兄と関係があつたのだという話を、私はその時始めて聞いた。

私は時々この女に会つて兄の事などを物語つて見たい気がしないでもない。しかし会つたら定めし御婆さんになつて、昔とはまるで違つた顔をしてはいはしまいかと考える。そうしてその心もその顔同様に皺が寄つて、からからに乾いてはいはしまいかとも考える。もしそうだとすると、彼女が今になつて兄の弟の私に会うのは、彼女にとってかえつて辛い悲しい事かも知れない。

## 三十七

私は母の記念のためにここで何か書いておきたいと思うが、あいにく私の知っている母は、私の頭に大した材料を遺して行つてくれなかつた。

母の名は千枝ちえといつた。私は今でもこの千枝という言葉なつを懐かしいものの一つに数えている。だから私にはそれがただ私の母だけの名前で、けつしてほかの女の名前であつてはならないような気がする。幸いに私はまだ母以外の千枝という女に出会つた事がない。

母は私の十三四の時に死んだのだけれども、私の今遠くから呼

び起す彼女の幻像は、記憶の糸をいくら辿たどって行つても、御婆さんに見える。晩年に生れた私には、母の水々しい姿を覚えている特権がついに与えられずにしまったのである。

私の知っている母は、常に大きな眼鏡めがねをかけて裁縫しごをしていた。その眼鏡は鉄縁の古風なもので、球たまの大きさが直さ径しわたし二寸以上もあつたように思われる。母はそれをかけたまま、すこし顚あごを襟えりもと

元へ引きつけながら、私をじつと見る事がしばしばあつたが、老眼の性質を知らないその頃の私には、それがただ彼女の癖とのみ考えられた。私はこの眼鏡と共に、いつでも母の背景になつていた一いつけん間の襖ふすまを想おもい出だす。古びた張はり交まぜの中に、生しょう死じ事じ大だい無む常じょう迅じん速そく云々と書いた石いし摺ずりなども鮮あざやかに眼に浮んで来る。

夏になると母は始終紺無地の紹の帷子かたびらを着て、幅の狭い黒く繻子ろじゆすの帯を締めしていた。不思議な事に、私の記憶に残っている母の姿は、いつでもこの真夏の服装なりで頭の中に現われるだけなので、それから紺無地の紹の着物と幅の狭い黒繻子の帯を取り除くと、後に残るものはただ彼女の顔ばかりになる。母がかつて縁えんば鼻なへ出て、兄と碁ごを打っていた様子などは、彼ら二人を組み合あわせた図柄ずがらとして、私の胸に収めてある唯一ゆいいつの記念かたみなのだが、そこでも彼女はやはり同じ帷子かたびらを着て、同じ帯を締めして坐まっているのである。

私はついぞ母の里へ伴つれて行かれた覚おぼえがないので、長い間母がどこから嫁よめに来たのか知らずに暮くらしていた。自分から求めて訊き

きたがるような好奇心はさらになかった。それでその点もやはり  
ぼんやり霞かすんで見えるよりほかに仕方がないのだが、母が四ツ谷  
おおばんまち  
大番町で生れたという話だけは確たしかに聞いていた。宅は質屋うちで  
あつたらしい。蔵が幾戸いくとまゑ前とかあつたのだと、かつて人から教  
えられたようにも思うが、何しろその大番町という所を、この年  
になるまで今だに通つた事のない私のことだから、そんな細かな  
点はまるで忘れてしまった。たといそれが事実であつたにせよ、  
私の今もっている母の記念のなかに蔵屋敷などはけつして現われ  
て来ないのである。おおかたその頃にはもう潰つぶれてしまつたのだ  
ろう。

母が父の所へ嫁にくるまで御殿奉公をしていたという話も臚おぼろ

氣げに覺おぼえているが、どここの大名の屋敷へ上つて、どのくらい長ながく勤こめていたものか、御殿奉公の性質せいかつさえよく弁わえない今の私わたしには、ただ淡あわい薫かをおりを残のこして消くえた香こうのようなもので、ほとんどとりとめとめめのない事實じじつである。

しかしそう云いえば、私は錦にしき絵えに描かいた御殿女中の羽織はつていいるような華は美でな総そう模も様やうの着物ぎを宅たくの蔵くらの中ちゆうで見た事ことがある。紅も絹み裏うらを付つけたその着物ぎの表あには、桜さくらだか梅うめだかが一面いっぺんに染ぞめ出でされて、ところどころに金きん糸いとや銀ぎん糸いとの刺ぬ繡いも交まじまつていた。これは恐おそらく当時たうじの襦か襦い褌どとかいうものなのだらう。しかし母ははがそれを打ち掛かけた姿すがたは、今いま想像さうぞうしてもまるで眼まなこに浮うかばない。私わたしの知しつている母ははは、常とこに大おほきな老眼らうがん鏡きやうをかけた御婆おばさんであつたから。

それのみか私はこの美しくしい襦袢ごこがいまきがその後小搔卷ごこがいまきに仕立直されて、その頃宅にできた病人の上に載せられたのを見たくらいだから。

### 三十八

私が大学で教おすわつたある西洋人が日本を去る時、私は何か饒せんべ別っを贈ろうと思つて、宅の蔵たかまきえから高蒔ひ絵ふさの緋ふさの房ふさの付いた美しい文箱ふばこを取り出して来た事も、もう古い昔である。それを父の前へ持つて行つて貰もらい受けた時の私は、全く何の気もつかなくつたが、今こうして筆とを執つて見ると、その文箱も小搔卷に仕立直

された紅絹裏の襦褌同様に、若い時分の母の面影おもかげを濃こまかに宿やしているように思われてならない。母は生しょう涯がい父から着物こしらを拵えて貰もらった事がないという話だが、はたして拵えて貰もらわないでもすむくらいな支度したくをして来たものだろうか。私の心に映るあの紺無こん地の紹ろの帷かたびら子も、幅の狭い黒縷くろじゆうす子の帯も、やはり嫁に來た時たんすからすでに簞笥たんすの中にあつたものなのだろうか。私は再び母に會つて、万事をことごとく口ずから訊きいて見たい。

惡いたずら戯ずで強情な私は、けつして世間の末すえツ子のこように母から甘く取扱あかわれなかつた。それでも宅うちじゆう中ちゆうで一番私を可愛かわいがつてくれたものは母だという強い親しみの心が、母に対する私の記憶うちの中には、いつでも籠こもっている。愛憎を別にして考くえて見ても、

母はたしかに品位のある床ゆかしい婦人に違なかつた。そうして父よりも賢かしこそうに誰の目にも見えた。気むずかしい兄も母だけには畏敬いけいの念を抱いだいていた。

「御母おつかさんは何にも云わないけれども、どこかに怖こわいところがある」

私は母を評した兄のこの言葉を、暗い遠くの方から明らかに引ひ張出つぱりだしてくる事が今でもできる。しかしそれは水に融とけて流れかかつた字体を、きつとなつてやつと元の形に返したような際きわどい私の記憶の断片に過ぎない。そのほかの事になると、私の母はすべて私にとつて夢である。途切とぎれ途切れに残っている彼女の面おも影かげをいくら丹念に拾い集めても、母の全体はとても髻ほうふつ髻する

訳に行かない。その途切途切とぎれに残っている昔さえ、半ばなか以上はもう薄れ過ぎて、しつかりとは掴つかめない。

或時私は二階へ上あがつて、たつた一人で、昼寝をした事がある。

その頃の私は昼寝をすると、よく変なものに襲われがちであった。私の親指が見る間に大きくなつて、いつまで経たつても留らなかつたり、あるいは仰向あおむきに眺めている天てん井じょうがだんだん上から下りて来て、私の胸を抑えおさつたり、または眼を開あいて普段と変らない周囲を現に見ているのに、身体からだだけが睡魔とりこの擒とらとなつて、いくらもがいても、手足を動かす事ができなかつたり、後で考えてさえ、夢だか正気だか訳の分らない場合が多かつた。そうしてその時も私はこの変なものに襲われたのである。

私はいつどこで犯した罪か知らないが、何しろ自分の所有でない金銭を多額に消費してしまった。それを何の目的で何に遣つたのか、その辺も明瞭でないけれども、小供の私にはとても償う訳に行かないので、氣の狭い私は寝ながら大変苦しみ出した。そうしてしまいに大きな声を揚げて下にいる母を呼んだのである。

二階の梯子段は、母の大眼鏡と離す事のできない、生死事大無常迅速云々と書いた石摺の張交にしてある襖の、すぐ後についているので、母は私の声を聞きつけると、すぐ二階へ上つて来てくれた。私はそこに立つて私を眺めている母に、私の苦しみを話して、どうかして下さいと頼んだ。母はその時微笑しながら、「心配しないでも好いよ。御母さんがいくらでも御金

を出して上げるから」と云つてくれた。私は大変嬉うれしかった。それで安心してまたすやすや寝てしまった。

私はこの出来事が、全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている。しかしどうしても私は実際大きな声を出して母に救を求め、母はまた実際の姿を現わして私に慰藉いしやの言葉を与えてくれたとしか考えられない。そうしてその時の母の服装なりは、いつも私の眼に映る通り、やはり紺無地こんむじの紹ろの帷子かたびらに幅の狭い黒くろ縹じゆす子の帯だったのである。

### 三十九

今日は日曜なので、小供が学校へ行かないから、下女も気を許したものと見えて、いつもより遅く起きたようである。それでも私の床を離れたのは七時十五分過であつた。顔を洗つてから、例の通り焼<sup>トースト</sup>麩と牛乳と半熟の鶏<sup>たまご</sup>卵を食べて、<sup>かわや</sup>のぼ<sup>のぼ</sup>に上ろうとすると、あいにく肥<sup>こいとり</sup>取が来ているので、私はしばらく出た事のない裏庭の方へ歩を移した。すると植木屋が物置の中で何か片づけものをしていた。不要の炭俵を重ねた下から威勢の好い火が燃えあがる周囲に、女の子が三人ばかり心持よさそうに煖を取っている様子が私の注意を惹<sup>ひ</sup>いた。

「そんなに焚<sup>たき</sup>火<sup>び</sup>に当ると顔が真黒になるよ」と云つたら、末の子が、「いやあーだ」と答えた。私は石垣の上から遠くに見える屋<sup>や</sup>

ねがわら  
根瓦ねがわらの融とけつくした霜しもに濡ぬれて、朝日にきらつく色を眺めたあ  
と、また家うちの中へ引き返した。

親類の子が来て掃除そうじをしている書齋の整頓するのを待つて、私  
は机を縁えんがわ側わに持ち出した。そこで日当りの好い欄干らんかんに身を靠も  
たせたり、頬杖ほおづえを突ついて考えたり、またしばらくはじつと動か  
ずにただ魂を自由に遊ばせておいてみたりした。

軽い風が時々鉢植はちうえの九花蘭きゅうからんの長い葉を動かかしにきた。庭木  
の中で鶯うぐいすが折々下手な囀さえずりを聴かせた。毎日硝子戸ガラスどの中に坐すわつて  
いた私は、まだ冬だ冬だと思おもっているうちに、春はいつしか私の  
心を蕩とうよう揺ゆし始めたのである。

私の冥想めいそうはいつまで坐まつていても結晶けつじやうしなかつた。筆をとつ

て書こうとすれば、書く種は無尽蔵にあるような心持もするし、あれにしようか、これにしようかと迷い出すと、もう何を書いてもつまらないのだという呑気な考も起つてきた。しばらくそこで佇ずんで<sup>た</sup>いるうちに、今度は今まで書いた事が全く無意味のよう<sup>に</sup>に思われ出した。なぜあんなものを書いたのだろうという矛盾が私を嘲弄<sup>ちやうろう</sup>し始めた。ありがたい事に私の神経は静まつていた。この嘲弄の上に乗ってふわふわと高い冥想<sup>めいそう</sup>の領分<sup>のぼ</sup>に上つて行くのが自分には大変な愉快になった。自分の馬鹿な性質を、雲の上から見下<sup>みおろ</sup>して笑いたくなつた私は、自分で自分を軽蔑<sup>けいべつ</sup>する気分に揺られながら、揺籃<sup>ようらん</sup>の中で眠<sup>ねむ</sup>る小供に過ぎなかつた。

私は今まで他の事<sup>ひと</sup>と私の事をごちやごちやに書いた。他の事を

書くときには、なるべく相手の迷惑にならないようにとの掛念けねんがあつた。私の身の上を語る時分には、かえつて比較的自由な空気の中に呼吸する事ができた。それでも私はまだ私に対して全く色気を取り除き得る程度に達していなかつた。嘘うそを吐ついて世間あざむを欺くほどの銜げんき気がないにしても、もつと卑いやしい所、もつと悪い所、もつと面目を失するような自分の欠点を、つい発表しずじまつた。聖オーガスチンの懺悔ざんげ、ルソーの懺悔、オピアムイーターの懺悔、——それをいくら辿たどつて行つても、本当の事實は人間の力で叙述できるはずがないと誰かが云つた事がある。まして私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は、——もしそれを罪と云い得るならば、——すこぶる明るいところからばかり写されていただ

ろう。そこに或人は一種の不快を感じずるかも知れない。しかし私自身は今その不快の上に跨またがって、一般の人類をひろく見渡しなから微笑しているのである。今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であつたかの感を抱いだきつつ、やはり微笑しているのである。

まだ鶯うぐいすが庭で時々鳴く。春風が折々思い出したように九花蘭きゅうからんの葉を揺うごかしに来る。猫がどこかで痛いたく噛かまれた米こめ噛かみを日に曝さらして、あたたかそうに眠っている。先刻さつきまで庭で護謨風船ゴムふうせんを揚あげて騒いでいた小供達は、みんな連れ立って活動写真へ行つてしまつた。家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸ガラスどを開け放つて、静かな春の光に包まれながら、恍惚うっとりとこの稿を書き終るのであ

る。そうした後で、私はちよつと肱ひじを曲げて、この縁側えんがわに一眠り眠るつもりである。

(二月十四日)

# 青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

初出：「朝日新聞」

1915（大正4）年1月13日～2月23日

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年8月22日公開

2012年9月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 硝子戸の中

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>